

---

# バカと昼寝男と超能力

red star

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バカと昼寝男と超能力

### 【Nコード】

N6750V

### 【作者名】

red star

### 【あらすじ】

いよいよ学園祭！ 文月学園ならではの試験召喚大会も催される。劣悪な環境と超頭の悪いクラスに絶望した瑞希の父親が、なんと娘に転校を勧めている。と明久は美波から打ち明けられる。

『バカとテストと召喚獣』の文月学園に、『とある魔術の禁書目録』の

キャラが、『伝説の勇者の伝説』のキャラが、やって来た！！

明久達の学園生活はどうなる！？

一応原作に則ります。途中からブレイクすると思いますが……。

途中からオリキャラも参戦！（オリキャラはチートです）

## 嵐の前の静けさ

今日のFクラスは騒がしかった。

なぜなら、転校生が何十人と来るからだ。

実は、なんとか山が噴火したせいで、火山灰やら、何やらが大変なことになって

なんとか山周辺の高校が『生徒の安全が第一』とか言い出したので一時的な転校をする生徒が、ここ、文月学園にも、何十人か来ることになったのだ。

説明が雑ですがすみません。元ネタはバカテス、伝勇伝、禁書目録です。

「なあ雄二、どんな人が来ると思う？」

「わかんねー、でも、やっぱり女子が良いに決まってる」

「雄二、後ろ後ろ。」

「んあ？つて！？翔子！？おまえいつからそこに痛たたたた！？」

「……浮気は許さない」

今、雄二にアイアンクローをしているのは霧島翔子さん。

ちなみに霧島さんは、Aクラス、つまり他クラスで、しかも学年主席だ。

そして、霧島さんの許婚の・・・

「誰がこいつのいいなず・・・ぐわああー！？」

「……雄二、素直になって」

「ぐわああー！？まで！まで、翔子！」

ゴホンッ、失礼、今、アイアインクローを、極められているのが、坂本雄二だ。

で、僕が吉井明久です。ちなみ天才です。

「何が天才よ！！れっきとしたバカじゃない！！」

「失礼な！！僕はバカじゃない！」

今、失礼なことを言ったのが、通称ぺったんこの・

「って！？痛い痛い痛い！？美波！？その関節はそっちに曲がらな・

・ぎゃああー！！？」

「アキー？地の文をわたしにまかせるか、関節をひとつ増やすか、どっちか選りなさい！！」

「まかせます！まかせますのでどうかこれ以上関節を増やさないでええー！！？」

「よろしい」

私は、島田美波です。で、ちなみに、髪型は基本ポニーテールです。そして、あそこにいるのが、私の恋敵の姫路瑞希です。

「はう！？ど、どうしたんですか？美波ちゃん？？なんか殺気がでてますよー！！？」

はっ！？いつの間にか殺気を放っていたみたい。

「何をしておるのじゃ。」

呆れたように言ったのは木下秀吉、外見は超絶美少女だけど、戸籍上は男。

「地の文がおかしいとおもふのじゃが！？戸籍上だけの男ではないぞ！？」

「……………違う、秀吉の性別は秀吉」

そう呟いたのはムツツリー二こと土屋康太だ。

「ムツツリー二！？わしは男じゃと言っておるのに……」

そんな平和？な会話が交わされているとき、

「おい、お前ら席に着けー」

野太い声でそう言ったのは『鉄人』こと西村先生だ。

その一言でみんなが黙る。

霧島さんはいつの間にかAクラスに戻っていた

「知ってると思うが、今日は転校生がくる、仲良くするように」  
「それじゃあ、入ってこい」

そろそろと転校生が入ってくる。

「右から順番に自己紹介してくれ」

いちばん右の女が自己紹介を始めた。

その女は、すごく綺麗だった。整いすぎている目鼻立ち、スタイル抜群の体

さらさらしてそうな金髪、何もかもが完璧に見えた。だが、その女は無表情だった。

その瞳は感情を映していなかった。

「名前はフェリス・エリス、趣味はだんごを食べること、以上だ」

驚くほど簡潔で簡単で殺伐とした自己紹介を終えると、次は男だ、寝癖全開の頭に猫背の長身痩躯、

眠そうな、それでいて優しそうな目をしている。

「あー、ライナ・リユートだ、趣味は寝ること、特技は歩きながら寝ること、よろしく」

だるそうな感じで欠伸をする。

「ふわああ・・・だめだ・・・めっちゃめっちゃ眠い」

次も男、ツンツン頭で背は高い方であろう。

「上条当麻だ、基本的に勉強は嫌い、よろしく」

好青年っぽい顔で、微笑む。

また男、金髪のツンツン頭でなぜかグラスンをかけている

「土御門元春だにゃー。よろしく」

白い歯を見せて笑う。

次は女、肩に届くくらいの茶色い髪、勝気っぽい目。

「御坂美琴です、よろしく」

できるだけ優しく見えるように微笑む。

すると、周りから、

「「「おおおー！！！！」」」

と歓声が上がった。

「なになに！？なんなのこのノリ！？」

「御坂さん！！俺と付き合ってください！！！」

「いや、俺と付き合ってください！」

「俺はフェリスさんと、ごばあ！？」

フェリスを狙ったFクラスの男は本人の手によって卓袱台に沈められた。

そこで、土御門が、

「みんな、だめだぜえ。御坂には先約がある。」

「だれだ！！そんな羨ましい奴は！！！」

土御門が勿体ぶって、名前を言う。

「それはなあ……」

ニヤリと笑った後に上条の方に指を向け、

「カミヤん、もとい、上条当麻だぜい！！！」

須川が席を立った。クラス全体を見渡し、

「HRの後すぐに『異端審問会』を開く！！『紐なしバンジー』の準備を！」

クラスの男子が声を揃える

「「「はっ！！！！」」」

「黙れえ！！！！」

鉄人が、場を鎮めるために怒鳴った

「まだ、一人いるんだ！静かにしろ！」

「失礼した。続けてくれ。」

最後の男が小さく呟く

「神童に、左腕さわんの侍、絶影ぜつえいの忍者、馬鹿うましかの友、よく揃ったもんだ」

「何か言ったか？」

「イイヤ、なんでもねえよ」

男が口を開く、

白い髪に赤い瞳、お世辞でも学生服が似合っているとは言えない風貌。

「一方通行アクセラレータだ」

そう言ってから口端を吊り上げ、口が裂けたような邪悪な笑みを浮かべ、こう言った。

「よろしくなア」

- - -  
- - -  
- - -  
- - -

それなりに頑張りました。処女作です。

文才ゼロなので申し訳ないですが、アドバイスお願いします。

多少のミスは見逃してくれると有り難いです。



## それぞれの思惑

Fクラスの代表である雄二は床にごさを敷いて座る僕らを見降ろしながらこんな宣言をしてきた。

「さて。そろそろ春の学園祭、『清涼祭』の出し物を決めなくちゃいけない時期が来たんだが」

「とりあえず」と、言葉を切る。

「議事進行並びに実行委員として誰かを任命する。そいつに全権を委ねるので、後は任せた」

心の底からどうでも良さそうな態度の雄二。

さてはあの野郎、興味が無いからって全部人に押し付けて寝るつもりだな？

試召戦争の時とは全然違う態度だ。

「吉井君。坂本君って学園祭はあまり好きじゃないんですか？」

小声で僕に話しかけてきたのは、クラスメイトの姫路瑞希さんだ。今日も綺麗な笑顔と大きな胸が眩しい。

「直接聞いたわけじゃないからわからないけど、楽しみにしているってことはなさそうだね」

雄二は興味のあることは、自分からやる奴だ。

正真正銘、興味が無いのだろう。

「そうなんですか……。寂しいです……」

「吉井君も興味が無いですか？」

少しだけ上目遣いで僕の顔を覗き込んでくる姫路さん。か、可愛い

……。

「うーん、どうだろ？ 別にそこまで何かをやりたいってわけでもないしなあ」

これは僕の正直な気持ちだ。授業が潰れるのは純粹に嬉しいけど、学園祭でこれをやりたい、という目的のようなものはない。

「私は……吉井君と一緒に、学園祭で思い出を作りたいです」  
「ほえ？」

彼女の意味深な台詞に、思わず間抜けな声が出てしまう。

「その、吉井君は知ってますか……？」  
と、姫路さんが聞いてくる。

「うちの学園祭ではとっても幸せなカップルが出来やすいって噂が  
ケホケホッ」

と、姫路さんが急に口元に手を当てて咳を始めた。顔も少し赤かつたし

風邪だろうか？いつもは明るい姫路さんの表情に少し翳りがさして  
しまう。

「大丈夫？」

「は、はい。すみません……」  
ちよつと苦しかったのか、若干目が潤んでいた。

教室の端では一方通行が座っていた

「ちつ、どうすんだ？」

誰にも聞こえないような声で呟く。

『問題無いですよ』

優しいような声アクセラレータが一方通行の頭の中に直接響いてくる。

「どうということだア？」

『だって、馬鹿うましの友が解決しますから』  
アクセラレータ

一方通行はニヤリと笑う、そして、問う。

「それは信頼かア？」

『いいえ、あくまでも信用ですから』

「んじゃ、学園祭実行委員は島田ということでもいいか？」

不意に耳に飛び込んできた雄二の台詞で今の状況を思い出す。

そう言えば学園祭についての話し合いをしているんだった。

「え？ ウチがやるの？ うん……、ウチは召喚大会に出るから、ちよつと困るかな」

「雄二。実行委員なら、美波より姫路さんの方がこういう役は合ってるんじゃないの？」

「え？ 私ですか？」

話題を振られて姫路さんが小首を傾かしげる。

気の強い美波よりも優しい姫路さんの方が、話し合いが荒れないで済むと思う。

「姫路には無理だな。多分全員の意見を丁寧に聞いているうちにタイムアップになる」

眠たげに返事をする我らがクラス代表。

そう言われてみると、確かに雄二の言うとおりだ。きっと姫路さんは少数派の意見を切り捨てたりはできないだろう。普段であれば美点なんだけど、こういった時はそれが逆に仇になってしまいいそう  
だ。

「それにね、アキ。瑞希も召喚大会に出るのよ」

「え？ そうなの？」

「はい。美波ちゃんと組んで出場するつもりなんです」

小さな手をぎゅっと握り締める姫路さん。

「学校の宣伝みたいな行事なのに。二人とも物好きだなあ」

僕らの通うこの文月学園には、世界的にも注目されている『試験召喚システム』というものがある。今年はその注目されているシステムを世間に公開する場として、清涼祭の期間中に『試験召喚大会』という企画が催<sup>もよ</sup>されるらしい。僕は全く興味が無いけど。

「ウチは瑞希に誘われてなんだけどね。瑞希ってば、お父さんを見返したいって言うてきかないんだから」

「お父さんを見返す？」

「うん。家で色々言われたんだって。『Fクラスのことをバカにされたんです！ 許せません！』って怒ってるの」

「あら。姫路さんが怒るなんて珍しいね」

「だって、皆のことを何もわかっていないくせに、Fクラスっていう理由だけでバカにするんですよ？ 許せませんっ」

「……………」

ごめん。皆をよく知っている僕でも、Fクラスはバカの集まりだと思っ

「だからFクラスのウチと組んで、召喚大会で優勝してお父さんの鼻をあかそうってワケ」

「だから、ウチはできないの。」

「なら、サポートとして副実行委員を選出しよう。それなら良いだろ？」

美波はボロボロの黒板に決選投票候補者の名前を書き連ねた。

『候補？……吉井』

あ、やっぱり僕だ。

『候補？……明久』

あ、これも僕だ。

「さて。この二人のどちらが良いか、選んでくれ」

「ねえ雄二。明らかに美波の候補の挙げ方はおかしいと思わない？」

『どうする？ どっちが良いと思う？』

『そうだなあ……。どちらもクズには変わりないんだが……』

「こらあつ！ 真面目に悩んでいるフリをするんじゃない！ あと、平然とクラスメイトをクズ呼ばわりするなんて、君らは人間のクズだ！」

まったく、このクラスのモラルはどうなっているんだか。

「ほらほら、アキってば。そんなことより、ウチとアンタでやることに決まったんだから、前に出て議事をやらないと」

「なんだか僕はいつもこんな貧乏くじを引かされている気がするよ」

……」

「何やるか、決めましょ」

つてわけで拳がった候補は、

【候補？ 写真館『秘密の覗き部屋』】  
【候補？ ウェディング喫茶『人生の墓場』】  
【候補？ 中華喫茶『ヨーロッパ』】

まあ、色々あって、結局は候補？になった。  
もちろん、姫路さんはホールだ。

「で、一応俺らは召喚大会に出ることになったんだよね  
と、いったのは上条当麻だ

「そうよ、もちろん超能力付きでね」

と言ったのは御坂美琴だ。

「そうしないと御坂とカミヤんと一方通行は勝てないぜい  
アクセラレータ

「ちっ、めんどくせエな」

「ちなみに点数の確認だけど、カミヤン」

「なんだ？」

「カミヤんって国語得意だったよな？」

「ああ、国語だけは、181点だ。他は50〜90点だけだな」

「まあそんなもんでもカミヤンは勝てるからな」

「土御門は？」

「ひみつだニヤー」

「他の二人は心配いらないな」

ここで上条が、

「あつちとも確認しないとな。シナリオが変わるとまずいんだろ？」

そこで一方通行が、  
アクセラレータ

「ちっ、逆だバカが、オレ達がシナリオを変えにきたンだよ」

「ただ、一応むこうと確認した方がいいかもしれないわね」

と御坂が言う

「だって、どこで負けるかとか覚えとかなきゃ、知らぬ間に優勝とかしてたら困るでしょ」

そういつてライナの方へ歩いて行った。

「まあ、とりあえず、問題はフェリス、お前だ！！」

「むっ、わたしが問題なのか？」

「ああ！お前が問題だ！」

そうなのだ。フェリスは点数が非常に微妙なのだ。

総合教科が1935点なのだ。

いや、Dクラスの代表からCクラスの中堅くらいの強さなのだが、パートナーが総合教科が4059点という異常な点数なのでどうしても見劣りしてしまう。

「まあ、対戦表の運がいいことを願うか・・・」

『さあ、僕の計画を崩すような歪みが現れることを願いますかね』

[illegible]

アドバイスをよろしくお願いします。



## 揃った欠片

「先生！ 覗きです！ 変態です！」

今、僕たちは秀吉のお姉さんにそんな事を言われてしまった

「逃げるぞ明久！」

「了解っ！」

なぜこんなことになってしまったと言うと・・・

- - - - - 数十分前に遡る さかのぼ - - - - -

「アキ、ちよつといい？」

帰りのHR ホームルームも終わって放課後。特に予定も無いので帰ろうとしたところ、美波に呼び止められた。

「ん、何か用？」

「用って言うか、相談なんだけど」

「相談？ 僕で良ければ聞かせてもらうけど」

「うん。ありがと。多分、アキが言うのが一番だと思うんだけど

その、やっぱり坂本をなんとか学園祭に引っ張り出せないかな？  
どうやら美波はFクラスの喫茶店の成功には雄二の先導が不可欠だと判断したようだ。ムキになって自分でなんとかしようとしなかったり、賢明な子なのかもしれない。

「うーん、それは難しいなあ……。」  
と言ってから、

「さっきも言ったけど、雄二は興味の無い事には徹底的に無関心だ

からね」

「でも、アキが頼めばきつと動いてくれるよね？」

美波の何かを期待したような眼差し。

「え？ 別に僕が頼んだからって、アイツの返事は変わらないと思うけど」

「ううん、そんなことない。きつとアキの頼みなら引き受けてくれるはず。だって」

「そりゃ確かに、よくつるんではいるけど、だからと言って別に」

「だってアンタたち、愛し合ってるんでしょう？」

「もう僕お婿にいけないいっ！」

どうして真顔でそんな台詞が出てくるんだろう。

「誰が雄二なんかと！ だったら僕は、断然、秀吉の方がいいよ！」

「……あ、明久？」

と、偶然近くにいた秀吉の動きが止まる。あれ？ なんだか妙なことになってない？

「そ、その、お主の気持ちは嬉しいが、そんなことを言われても、ワシらには色々と障害があると思うのじゃ。その、ホラ。歳の差とか……」

「ひ、秀吉！ 違うんだ！ もの凄い誤解だよ！ さっきのはただの言葉のアヤで！ それと、僕らの間にある障害は決して歳の差じゃないと思う！」

秀吉が顔を赤らめて俯く。ど、どうしよう！ 秀吉ならいいかも、って思えてきた！

「それじゃ、坂本は動いてくれないってこと？」

「え？ あ、うん。そういうことになるかな」

「なんとかできないの？ このままじゃ喫茶店が失敗に終わるよう……」

少し深刻そうに顔がうつむいた。

「ところで、おぬしらは何の話をしておるのじゃ？ そんなに思い

つめた顔をするとは、随分と深刻な話のようじゃが」

「深刻ってほどじゃないんだけど、喫茶店の経営とクラスの設備の話で」

「アキ、そうじゃないの。本当に深刻な話なのよ……」

「実は、瑞希なんだけど」

「あの子、転校するかもしれないの」

「美波！ 姫路さんが転校って、どういうことさ！」

「どうもこうも、そのままの意味。このままだと瑞希は転校しちゃうかもしれないの」

「このままだと……？」

秀吉が小首を傾げる。

「瑞希の転校の理由が『Fクラスの環境』なの」

「ってコトは、転校は両親の仕事の都合とかじゃなくて」

「そうね。純粋に設備の問題ってことになるわ」

そう言われて、僕は思わず納得してしまった。

姫路さんにこのFクラスの設備は相応しくない。

「それに瑞希は、身体も弱いから……」

「そうだよな。それが一番マズいよね……」

「……アキはその……瑞希が転校したりとか、嫌だよな……？」

美波が探るような目でこちらを見ってくる。

僕がそんなに冷たい人間に見えるんだろうか。それは心外だ。

「もちろん嫌に決まってる！ 姫路さんに限らず、それが美波や秀吉であつても！」

家庭の事情でどうしようもないならともかく、こんな理由で仲間が離れていくなんて絶対に嫌だ。

「そっか……。うん、アンタはそうだよな！」

美波が嬉しそうに頷く。

ちなみに雄二だったらどうでもいいというのは秘密だ。

「そういうことなら、なんとしても雄二を焚き付けてやるさ!」

「そうじゃな。ワシもクラスメイトの転校と聞いては黙っておれん」

「それじゃ、まずは雄二に連絡を取らないとね」

ポケットから携帯を取り出して、雄二の番号を呼び出す。教室の中にヤツの姿は見当たらないけど鞆かばんはまだあるみたいだし、学校内のどこかにはいるはずだ。

P r r r rと、呼び出し音が受話器から響く。

『 もしもし 』

「あ、雄二。ちょっと話が」

『 明久か。丁度良かった。悪いが俺の鞆を後で届けに げっ! 翔子! 』

「え? 雄二。今何をしてるの?」

『 くそつ! 見つかつちまった! とにかく、鞆を頼んだぞ! 』

「雄二!? もしもし! もしもーし!」

携帯電話からはプー、プー、という無機質な音しか返ってこない。

「坂本はなんて言ってた?」

「えっと、『見つかつちまった』とか『鞆を頼む』とか言ってた」

「……………なにそれ?」

ここで、

「ちよつと二人とも協力してくれるかな?」

「それはいいけど……………坂本の居場所はわかつているの?」

「大丈夫。相手の考えが読めるのは、なにも雄二だけじゃない」

「何か考えがあるようじゃな」

「まあね」

ニヤリと笑って、僕は二人を連れて教室をあとにした。

そして、

「やあ雄二。奇遇だね」

部屋の物陰ものかげで大きな身体を小さくしている雄二に話しかける。

「……どういう偶然があれば女子一更衣室で鉢合わせするのか教えてくれ」

「やだな。ただの偶然だよ」

「嘘をつけ。こんな場所で偶然会うワケが」

ガチャッ

音を立ててドアが開くと、その向こうには体操服姿の女子の姿があった。

「えーっと……あれ？ Fクラスの問題児コンビ？ ここ、女子更衣室だよな？」

「やあ木下優子さん。奇遇だね」

「秀吉の姉さんか。奇遇じゃないか」

「あ、うん。奇遇だね」

あつはつは、と爽さわやかに笑ってみせる。うんうん。偶然偶然。

「先生！ 覗きです！ 変態です！」

「逃げるぞ明久！」

「了解っ！」

更衣室の小さな窓から表に飛び出す。やっぱりごまかせなかったか！

と、言うことだ

『吉井と坂本だと！？ またアイツらかつ！』

「雄二、マズい！ 鉄人の声だ！」

「とにかく走れ！」

上靴だけど、構わず外を突っ走る。相手は鉄人。捕まったら最後だ。

「見つけたぞ！ 二人とも逃がすか！」

後方から野太い声が近付いてくる。くそっ！ もう追いついてきたか！

「明久！」

隣を走る雄二の声。その視線は、前方の新校舎二階にある開け放たれた窓に向いていた。あそこから校舎内に逃げ込もうってワケか。  
「オーケー！」

雄二からの合図を受け、走りながら上着を脱ぐ。そして、その間に雄二が僕より先行する。

「そっちは行き止まりだ！ 観会して指導を受けろ！」

「行け、明久！」

先行していた雄二が立ち止まってこちらを向く。

「あいよっ！」

雄二が手を組んで作った踏み台に足をかけ、一気に飛び上がる。その瞬間に雄二が勢いよく腕を跳ね上げてくれたので、僕はなんなく開いている二階の窓に飛びつくことができた。

「くっ！ このバカども！ こういう時だけ無駄に運動神経を発揮するとは！」

舌打ちでもしそうな雰囲気鉄人をよそに、校舎の中に入った僕は脱いでおいた制服を窓から垂らす。

「あらよつと！」

今度は雄二が壁を蹴って跳び、空中で僕の制服を掴んだ。

「よいしょおっ！」

その隙間に一本釣り。

ビツと制服から嫌な音がしたけど

僕らは無事に校舎内に侵入することができた。

『吉井！ 坂本！ 明日は逃がさんぞ！』

流石の鉄人も独力で二階までは来れないようで、悔しそうな遠吠えが響いてきた。

「はぁ……。また要らない悪評が増えていく……」

僕達はFクラスに戻り、雄二に姫路さんの転校の話を聞かせた。

「そうか。姫路の転校か……」

「そうになると、喫茶店の成功だけでは不十分だな」  
オンボロの教室内を見渡して雄二が告げる。

「不十分？ どうして？」

「姫路の父親が転校を勧めた要因は恐らく三つ」と、雄二が言う。

「まず一つ目。ござとみかん箱という貧相な設備。快適な学習環境ではない、という面だな。これは喫茶店が成功したら利益でなんとかできるだろう」

「二つ目は、老朽化<sup>ろうきゅう</sup>した教室。これは健康に害のある学習環境という面だ」

「一つ目は道具で、二つ目は教室自体ってこと？」

「そうだ。これに関しては喫茶店の利益程度じゃ改善は難しい。教室自体の改修ともなると、学校側の協力が不可欠だ」

そして最後の三つ目。レベルの低いクラスメイト。つまり姫路の成長を促す<sup>うなが</sup>ことのできない学習環境という面だ」

部活動とかでもそうだけど、能力を伸ばす為には実力の近い競争相手の存在が重要になる。Fクラスにいる限り、そんな競争相手は望むべくもない。

「参ったね。随分と問題だらけだ」

「そうじゃな。一つ目だけならともかく、二つ目と三つ目は難しいの」

「そうでもないさ。三つ目の方は既に姫路と島田で対策を練<sup>ね</sup>っているんだらう？」

雄二が美波に視線を送る。

「この前、瑞希に頼まれちゃったからね。『どうしても転校したくないから協力して下さい』って。召喚大会なんて見世物にされるだけみたいで嫌だったけど、あそこまで必死に頼まれたら、ね？」

「姫路と島田が優勝したら、喫茶店の宣伝にもなるじゃろうし、一石二鳥じゃな」

秀吉がうんうんと頷く。うなず 僕らの教室は古くて汚い旧校舎にあるから、この宣伝の効果は決して小さくないはずだ。

「で、坂本。それはそうと、二つ目の問題はどうするの？」

二つ目の問題、教室の改修。これは僕らだけでは難しい。

「どうするも何も、学園長に直訴じきそしたらいいだけだろ？」

さも当然、と言わんばかりの雄二の態度。

「それだけ？ 僕らが学園長に言っただくらいで何とかしてくれるかな？」

「あのだ。ここは曲りなりにも教育機関だぞ？ いくら方針とはいえ、生徒の健康に害を及ぼすような状態であるなら、改善要求は当然の権利だ」

もしそれで何とかなるなら、三つの問題は全て解決する見込みがあるということだ。

「それなら、早速学園長に会いに行こうよ」

美波の声援を受け、僕と雄二は学園長室を目指して教室を後にした。

「今日は学園長にお話があつて来ました」

学園長の前に立ち、雄二が話を切り出す。意外だ。敬語を知っていたのか。

失礼しました。俺は二年F組代表の坂本雄二。それでこつちが「雄二が僕を示し、紹介する。」

「二年生を代表するバ力です」



どうしてコイツは普通に名前を言えないのだろう。

「ほう……。そうかい。アンタたちがFクラスの坂本と吉井かい」

「ちよつと待つて学園長！ 僕はまだ名前を言つてませんよね！？」

さっきの紹介で僕の名前が連想されたという事実には涙が出そうだ。

「気が変わったよ。話を聞いてやるうじやないか」

まるで映画の悪役のように口の端を吊り上げる学園長。

これで人を教育しようというのだから不思議だ。

「ありがとうございます」

「礼なんか言う暇があつたらさつさと話しな、ウスノロ」

「わかりました」

それにしても驚かされる。こんなにも口汚く罵倒されているのに、雄二の態度や言動は落ち着いたままだなんて。コイツがここまで大人なヤツだとは思わなかった。

「Fクラスの設備について改善を要求してきました」

「そうかい。それは暇そうで羨ましいことだね」

「今のFクラスの教室は、まるで学園長の脳みそのように穴だらけで、隙間風が吹き込んでくるような酷い状態です」

あ、言動が綻び始めた。

「学園長のように戦国時代から生きている老いばれならともかく、今の普通の高校生にこの状態は危険です。健康に害を及ぼす可能性が非常に高いと思われます」

丁寧な口調の中に危険な言葉がちりばめられている。これは雄二も相当キレてるなあ。

「要するに、隙間風の吹き込むような教室のせいで体調を崩す生徒が出てくるから、さつさと直せクソババア、というワケです」

うん。やっぱり僕の知ってるいつもの雄二だ。

「却下だね」

「雄二、このババアをコンクリに詰めて捨ててこよう」

「……明久。もう少し態度には気を遣え」

はっ！？ つい本音が！

「まったく、このバカが失礼しました。どうか理由をお聞かせ願えますか、ババア」

「そうですね。教えて下さい、ババア」

「……お前たち、本当に聞かせてもらいたいと思ってるのかい？」  
学園長が呆れ顔で僕らを見る。僕らが何かおかしいことでも言うただろうか？

「理由も何も、設備に差をつけるのはこの学園の教育方針だからね。ガタガタ抜かすんじゃないよ、なまっちろいガキども」

「と、いつもなら言っているんだけどね」

「可愛い生徒の頼みだ。こちらの頼みも聞くなら、相談に乗ってやるんじゃないか」

「清涼祭せいりょうさいで行われる召喚大会は知ってるかい？」

「ええ、まあ」

「じゃ、その優勝商品は知ってるかい？」

「え？ 優勝賞品？」

「学校から贈られる正賞には、賞状とトロフィーと『白金しろがねの腕輪』  
副賞には『如月ハイランド プレオープンプレミアムペアチケット』  
が用意してあるのさ」

「この副賞のペアチケットなんだけど、ちょっと良からぬ噂を聞いてね。できれば回収したいのさ」

「如月グループは如月ハイランドに一つのジंकスを作ろうとしているのさ。『ここを訪れたカップルは幸せになれる』っていうジंकスをね」

「？ それのどこが悪い噂なんです？ 良い話じゃないですか」

「そのジंकスを作る為に、プレミアムチケットを使ってやって来

たカップルを結婚までコーディネートするつもりらしい。企業として、多少強引な手段を用いてもね」

「そのカップルを出す候補が、我が文月学園ってわけさ」

「くそつ。うちの学校は何故か美人揃いだし、試験召喚システムという話題性もたっぷりだからな。学生から結婚までいけばジंकスとしては申し分ないし、如月グループが目をつけるのも当然ってことか」

悔しげに唇を噛む雄二。なんだかさつきから様子がおかしいな？

「ふむ。流石は神童と呼ばれていただけはあるね。頭の回転はまずまずじゃないか」

「ま、そんなワケで、本人の意思を無視して、うちの可愛い生徒の将来を決定しようって計画が気に入らないのさ」

本当に生徒を可愛いと思っているのかは疑問だが。

「つまり交換条件ってのは」

「そうさね。『召喚大会の賞品』と交換。それができるなら、教室の改修くらいしてやろうじゃないか」

「わかりました。この話、引き受けます」

「そうかい。それなら交渉成立だね」

学園長は『計画通り』といった顔をしてニヤリと笑った。

「ただし、こちらからも提案がある」

話もまとまったし、教室に戻ろうと思ったところで雄二が学園長に話しかけた。

「なんだい？ 言ってみな」

「召喚大会は二対二のタッグマッチ。形式はトーナメント制で、一回戦が数学だと二回戦は化学、といった具合に進めていくと聞いている」

「対戦表が決まったら、その科目の指定を俺にやらせてもらいたい」  
そう告げる雄二は、何故か学園長の反応を試しているかのように鋭

い目つきをしていた。何か気になることでもあったのだろうか？

「ふむ……。いいだろう。点数の水増しとかだったら一蹴していたけど、それくらいなら協力しようじゃないか」

「……ありがとうございます」

こうして、文月学園最低コンビが誕生することになった。

……雄二と明久が出て行った後の学園長室……

「嫌なやつだね」

と、学園長が話しかける。

『あれっ？ばれちゃってました？』

誰もいないはずだった空間に一人の青年がいた。

『解ってくれました？神童の実力が』

「あれでもまだ 神童 としての記憶が入ってないんだろ？」

『はい、その通りです』

「ただ、馬鹿<sup>うまし</sup>の友 に関しては、解らないね」

『何がですか？』

「どんな実力を隠しているのか、だよ」

「まあ、私ごとがオカルトを知ろうとするのが間違いなのかもしれないけどね」

『ははは、そんなことはありませんよ。』

「それよりあんた、 堕ちた勇者 を連れて来たね」

「悪魔 と引き合わせられたのかい？」

『今、引き合わせてる途中ですから』

「まったく 堕ちた勇者 をあんな若い子に…銀髪のイケメンだったじゃないか」

『まさか！？シ、シオンさんに欲情した！？』

「この歳で欲情してたら異常だよ!!!」

『ところでまだ、僕は2・Fにいますよね?』

「あんたの願いを突っぱねるほど、わたしはモーロクしちゃいない」  
『僕に惚れてたんですか!?!?』

「もう、疲れてきたさね」

一度大きく息を吸って、少し大きめの声で学園長が言う。

「あたしは、あんたを恐れてるんだよ」

『あはは、それは初耳です』

そう言うてから、

『いつまでもここに居るわけにはいきませんし、お暇いとまさせていただきます』

言い終わらない内に青年は消えていた。

男が去った後、今度こそ、だれもない空間に向かって呟いた。

「嫌なやつだね」

[illegible]

アドバイスをよろしくお願いします

## 波乱のトーナメント

せりょうさい  
清涼祭初日の朝。

僕らの教室はいつもの小汚い様相を一新して、中華風の喫茶店に姿を変えていた。

「このテーブルなんて、パツと見は本物と区別がつかないよ」  
教室内のいたるところに設置されているテーブル。  
実はこれ、僕らの教室にあったみかん箱だったりする。

巧く積み重ねて小綺麗なクロスをかけることで、汚い箱は立派なテーブルに変身していた。

「あ、それは木下君が作ってくれたんですよ。どこから綺麗なクロスを持ってきて、こう手際よくテキパキと」

尊敬の目で秀吉を見ている姫路さん。

そっか。このクロス、演劇部で使っている小道具か。道理で良い生地だと思った。

「ま、見かけはそれなりのものになったが。その分、クロスを捲めくるとこの通りじゃ」

秀吉がクロスを捲る。すると、その下には見憤れた汚い箱が。

「これを見られたら店の評判はガタ落ちね」

美波が僕の隣から覗き込んでくる。

確かに彼女の言うとおりだ。

こんなみすばらしいみかん箱を見られたら、イメージダウンは免れない。

「きつと大丈夫だよ。こんなところまで見ないだろうし、見たとしてもその人の胸の内にしまっておいてもらえるさ」

「そうですね。わざわざクロスを剥がしてアピールするような人は来ませんよ、きつと」

そんなことをするヤツがいるとしたら、営業妨害が目的としか思えない。

「室内の装飾も綺麗だし、これならうまくいくよね？」

学園祭のレベルとしては充分過ぎるほどの完成度だ。これならお客さんも沢山来てくれるだろう。

「ふわぁ、どう？学園祭の準備は進んでる？」

床で寝ていたライナが目を覚ます。

「……お前は仕事しろよ……」

よし、息が揃ったな。

「そつだぞライナ、ちゃんと仕事をしろ。私も頑張っているんだ」  
そう言ったフェリスは、ござを敷いてお茶をすすっていた。

「いや、おまえもやれよ！」

「ん？お前は『美人はなにをしてもいい』という諺ことわざを知らないのか？」

「ねえよ……そんな諺……」

「つーか、みんな騙されてんだよ。こんな性格崩壊女が……」

「ん、誰の性格が崩壊してるって？」

「冗談です、冗談なんですその首元に突き付けているだんこの串を降ろしてくれませんか？」

ライナは冗談じゃない命の危機を回避するために命乞いをしていた。

「……………ヤムチャ  
飲茶も完璧」



「おわっ」

いきなり後ろから響くムツツリー二の声。  
いつもながら存在感を消すのが巧い。

別に常日頃はそんなことをしなくてもいいと思うんだけどな。

「ムツツリー二、厨房の方もオーケー？」

「……………味見用」

そう言つてムツツリー二が差し出したのは、木のお盆。

上には陶器のティーセットと胡麻団子が載っていた

「わあ……………美味しそう……………」

「土屋、これウチらが食べちゃっていいの？」

「……………（コクリ）」

「では、遠慮なく頂こうかの」

姫路さん、美波、秀吉の三人が手を伸ばし、作りたてで温かい胡麻団子を勢いよく頬張る。

「お、美味しいです！」

「本当！ 表面はカリカリで中はモチモチで食感も良いし！」

「甘すぎないところも良いのう」

と、大絶賛。やっぱり女の子。甘い物が好きなんだなあ、三人とも。

「お茶も美味しいです。幸せ……………」

「本当ね……………」

姫路さんと美波の目がトロンと垂れる。トリップ状態だ。そんなに美味しいんだらうか？

「それじゃ、僕も貰おうかな」

「……………（コクコク）」

ムツツリー二が残った一つを僕に差し出す。

楊枝がないので、手でつまんで軽く一口だけ頬張ってみた。

「ふむふむ。表面はゴリゴリでありながら中はネバネバ。甘すぎず、辛すぎる味わいがとっても　んゴパっ」

僕の口からありえない音が出た。そして目に映るのは僕の一六年間の人生の軌跡

ああ、あの頃は良かったなあ……って、これは走馬灯じゃないか！

「あ、それはさつき姫路が作ったものじゃな」

「……………！！（グイグイ！）」

「む、ムツリーニ！ どうしてそんなに怯えた様子で胡麻団子を僕の口に押し込もうとするの！？ 無理だよ！ 食べられないよ！」  
ムツリーニが団子の残り半分を僕の口に押し付けてくる。

これは走馬灯をすることのできる特殊な飲茶だ！ 一般人は決して口にしちゃいけない！

「うーっす。戻ってきたぞー」

と、そんなところに雄二が戻ってきた。

「あ、雄二。おかえり」

「ん？ なんだ、美味そうじゃないか。どれどれ？」

そして、躊躇<sup>ためら</sup>いなく僕の食べかけのバイオ兵器を口に運ぶ。

「……………たいした男じゃ」

「雄二。キミは今、最高に輝いてるよ」

「？ お前らが何を言っているのかわからんが……。ふむふむ。表面はゴリゴリでありながら中はネバネバ。甘すぎず、辛すぎる味わいがとっても んゴパっ」

あ、なんか既視感<sup>デジャブ</sup>。

「あー、雄二。とっても美味しかったよね？」

床に倒れ伏した雄二に対して「これは姫路さんの料理だよ。まさ

か酷いことなんて言わないよね?』と目で訴える。目が合っていないから伝わったのか不安だけど。

「ふっ。何の問題も無い」

床に突っ伏したままで、雄二が道草をしてきた。

「あの川を渡ればいいんだろう?」

それはきつと三途<sup>さんず</sup>の川だ。

「ゆ、雄二! その川はダメだ! 渡ったら戻れなくなっちゃう!」  
まさかあの一口で致命傷<sup>ちめいしょう</sup>だったなんて。姫路さんの手料理  
相変わらず恐ろしいキレ味だ。

「え? あれ? 坂本君はどうかしたんですか?」

きちんとした方の胡麻団子で夢見心地になっっていた姫路さんが  
ようやくこっちの様子に気が付く。見られていなくて良かった。

「あ、ホントだ。坂本、大丈夫?」

美波も今までトリップしてたのか。

これはもしかすると、失敗していない方の胡麻団子はかなりイケて  
るのかもしれない。

売り上げへの期待大だ。

「大丈夫だよ、ちょっと足が攣<sup>くっ</sup>っただけみたいだから。おい、ゆ  
ーじー、おきろー」

とりあえず、おどけた口調で雄二を起こす仕草を試みる。

ただし、手は必死に心臓マッサージをしながら。こうなると生死は  
五分五分だ……!

「六万だと? バカを言え。普通<sup>わたくし</sup>渡し賃<sup>ちん</sup>は六文と相場が決まっ  
はっ!」

よしっ、蘇生<sup>そせい</sup>成功。こうして、人知れず尊い命がまた一つ救われ  
たのです。

「雄二、足が攣<sup>くっ</sup>っただよな?」

すかさず余計なことを言い出す前に畳<sup>たた</sup>み掛ける。

今回はアイコンタクトの余裕もない。

「足が攣<sup>くっ</sup>った? バカを言うな! あれは明らかにあの団子の」

（「……もう一つ食わせるぞ」）

「足が攣ったんだ。運動不足だからな」

雄二が頭の良い奴で本当に良かった。流石の僕でもクラスメイトを殺すのは忍びない。

（……明久、いつかキサマを殺す）

（……上等だ。殺られる前に殺ってやる）

笑顔を貼り付けて小声のやり取り。こんな僕らは仲良し二人組。

「ふーん。坂本ってよく足が攣るのね？」

マズいな。以前と同じような状況を美波が怪nder。

「ほら、雄二って余計な脂肪がついてないでしょう？　そういう身体って、筋が攣りやすいんだよ。美波も胸がよく攣るからわかるとぐべあつ！」

「……俺が手を下すまでもなかったな」

美波の拳を受けた僕に、雄二が哀れみの視線を送ってくる。

なんだか最近こんなのばかりだ……。

「喫茶店はいつでもいけるな？」

「バッチリじゃ」

「………お茶と飲茶も大丈夫」

本当に大丈夫と言えるんだろうか？

姫路さん製の飲茶が混ざってないか、一抹の不安がよぎるんだけど。

「よし。少しの間、喫茶店は秀吉とムツツリー二に任せる。俺は明久と召喚大会の一回戦を済ませてくるからな」

そう言って秀吉とムツツリー二の肩を叩く。

「あれ？　アンタたちも召喚大会に出るの？」

確認するように僕を見る美波。

「え？　あ、うん。色々あってね」

「もしかして、賞品が目的とか……？」

美波の探るような視線が刺さる。

「うん。一応そういうことになるかな」

詳しく言つと賞品と設備の交換が目的だけだね。

そう言えば白金しろがねの腕輪うでわつても賞品みたいだけど、あれも交換するのかな？

噂によると召喚獣を二体同時に喚よび出せるタイプと

先生の代わりに立会人になれるタイプの腕輪があるとか。

特別欲しいわけじゃないけど、貰えるなら貰っておきたい。

「……誰と行くつもり？」

「ほえ？」

美波の目がスツと細くなった。こ、これは……攻撃色！？

「吉井君。私も知りたいです。誰と行くこうと思っていたんですか？」

気が付けば姫路さんまで戦闘モード。

「だ、誰と行くって言われても……」

きつと二人が言っているのはペアチケットのことだろう。

困った。誰と行くも何も、学園長に渡すだけなんだけだな。

でも、約束したから正直には言えないし……。

「明久は俺と行くつもりなんだ」

答えに詰まっていると、すかさず雄二のフォローが入った。  
それを聞いて目を丸くしている美波。ふふっ。驚くのも無理はな

い。

「え？ 坂本とペアチケットで、『幸せになりに』行くの……？」  
なぜなら、僕自身ですら驚きの新事実なのだから。

「ってバカあつ！ 誰が雄二と幸せになりに行くんだよ！ これは物凄い誤解だよ！」

雄二から小声のメッセージが届く。

これ以上ないほど不本意だけど、これも姫路さんの為。

雄二も同性愛疑惑を我慢するみたいだし、ここは僕もグツと堪えて

……

「俺は何度も断っているんだがな」

え？ 何？ 裏切り？

「アキ。アンタやつぱり、木下よりも坂本の方が……」

「ちよつと待って！ その『やつぱり』って言葉は凄く引かかる！ それと秀吉！ 少しでも寂しそうな表情をしないでよ！」

マズい。このままだと間違った情報が流れて、

同性愛の似合いそうな生徒ランキングがまた上がってしまう！

「吉井君。男の子なんですから、できれば女の子に興味を持った方が……」

「それができれば明久だつて苦労はしてないさ」

「雄二、もっともらしくそんなことを言わないで！ 全然フォローになってないから！」

コイツとはいつか決着をつけねばなるまい。

「つと、そろそろ時間だ。行くぞ明久」

「……………くつ！ と、とにかく、誤解だからね！」

まるで小悪党の捨て台詞のように弁明し、僕と雄二は教室を後にした。

「もうそろそろ行くっぜ、フェリス」  
「ん、そうだな」

「オイ、時間だ土御門、行くぞ」  
「おっ、もうそんな時間かじゃー」

「さて、いきましょう」  
「ああ、そうだな」

『ちよつと観戦しますか』

そして、

「えー。それでは、試験召喚大会一回戦を始めます」  
校庭に作られた特設ステージ。そこで召喚大会が催される。  
「三回戦までは一般公開ありませんので、リラックスして全力を出してください」

今回立会人を務めるのは数学の木内先生。きのうち 当然勝負科目は数学となる。

「初戦が同じクラスか、こりゃ勝ってイイのかア？土御門」  
「問題無いにゃー、って事で思う存分に暴れていいぜい」

「瑞希、絶対勝つわよー！！（大丈夫、相手は同じFクラス、数学な

ら！）」

「はい！！美波ちゃん！（勝てる！勝つんだ！）」

「では、召喚して下さい」

「サモン「試獣召喚っ！」」

『Fクラス 姫路瑞希 & Fクラス 島田美波  
数学 432点 & 202点  
』

「へエ、中々じゃねエかア、流石だな」

「アクセラレータんじゃ、行くぜい一方通行！！」

「サモン「試獣召喚」」

現れる彼らの召喚獣。アクセラレータ一方通行の召喚獣は灰色と白の柄の長袖、

土御門の召喚獣はアロハシャツに制服という格好で二人とも、

「……素手？」

と言ったのは島田。

「何かこれだと弱い者いじめになっちゃいそうですね」

姫路が言う。

「悪いけど、勝たせてもらうわ！優勝しないといけないの！」



島田が宣言したところで、

「はぁ、どっちが弱いんだか…」

『Fクラス 土御門元春 & Fクラス アクセラレータ  
数学 65点 & 759点  
』

彼らの点数が表示される

「「ええ!?!」」

島田と姫路は同時に驚いた。

「なっ、なんて点数!」

「ど、どういふこと!?!」

土御門が、

「どうもこうも、こいつの得意教科なだけにやー」

「そ、そんな」

そこで島田が、

「二人とも素手なんだからリーチを利用し…」

言葉の途中で二人の召喚獣の間に暴風が吹き荒れる。

アクセラレータ  
一方通行が

「今のをどっちかにやってたら死んでるぜエ」

「くっ、仕方ない、アクセラレータ一方通行を集中的に攻撃するわよ!」

「はい!」

島田が右側から大きく迂回してアクセラレータ一方通行に迫る。

姫路は前に進みながら炎を発射する。

「なるほどオ、だから迂回したんだな」

アクセラレータ  
一方通行は全く動こうとしない。

アクセラレータ  
しかし、炎は一方通行に迫って来る

なぜ動かないかはすぐに解った

「そ、そんな、何で……っ！」

アクセラレータ  
炎が一方通行に当たって跳ね返って来たのだ。

姫路は、それを見て横っ跳びに飛んだが、もう遅い。

アクセラレータ  
そこは、一方通行の射程圈内。

アクセラレータ  
自分の放った炎に当たりながら、一方通行の声を聞く。

「風速128メートル毎秒の暴風だア。じゃあな」

暴風の塊が姫路の召喚獣に当たった。

『Fクラス 姫路瑞希 & Fクラス 島田美波

数学 0点 & 202点

』

アクセラレータ  
島田は動きを止めた。しかし、その瞬間には一方通行が目の前にいた。

「くっ……！」

アクセラレータ  
風をまとった一方通行の拳が島田に当たる。

『Fクラス 姫路瑞希 & Fクラス 島田美波

数学 0点 & 0点

』



## バグスキル

- - - - - その数分後 - - - - -

「頑張ろうね、律子<sup>りつこ</sup>」

「うん」

対戦相手の女子二人が頷<sup>うなず</sup>き合う。微笑ましい光景だ。  
ところで、どこかで見た二人のような……？

「では、召喚して下さい」

「「試<sup>サモン</sup>獣召喚っ！」」

相手の二人が喚<sup>よ</sup>び声をあげると

お馴染みの魔法陣が足元に現れて召喚者の姿をデフォルメした形態  
を持つ試験召喚獣が喚び出された。

『Bクラス	岩下 <sup>いわした</sup> 律子	&	Bクラス	菊入 <sup>きくいり</sup> 真由美
数学	179点	&	163点	』

向こうは二人とも似たような装備の召喚獣だ。西洋風の鎧と剣を  
持っている。

姫路さんの召喚獣を一般的な強さにしたような感じだ。

「さて、僕らも召喚しようか」  
「そうだな」

「「試獣召喚」」  
「」

現れる僕らの召喚獣。僕の召喚獣は相変わらずの改造制服と木刀を装備している。

一方、神童とまで謳われた我らが代表の召喚獣は

「……素手？」

何も手に持っていないように見える。目に見えない剣とか？

「馬鹿が。よく見る」

雄二が召喚獣を動かし、拳を掲げてみせる。

「メリケンサックを装備しているだろう？」

「ぎ、雑魚だ！ 雑魚がいる！」

なんて弱そうな召喚獣なんだ。

装備がメリケンサックなんて、他の召喚獣には一体もいなかったぞ。

「行くわよ、修学旅行のお土産コンビ」

「律子、違うよ。チンピラコンビだよ」

僕らの召喚獣は木刀&メリケンサックを手にした改造制服のコンビだ。

もはや何を言われても否定できない。

『Fクラス 坂本雄二 & Fクラス 吉井明久  
数学 179点 & 63点

』

僕らの点数が参考として表示される。

「！？ ゆ、雄二！」

「なんだ」

「どうしてそんな点数になつてゐるの！？」

「179点なんて、Bクラス並の点数だ。バカのはずなのに！ バカのはずなのに！」

「前回の試召戦争以来、Aクラスに勝つ為に本気で勉強をしているからな」

と、なぜか苦々《にがにが》しい表情で告げる雄二。

この短期間でここまで伸びるとは。流石に神童と呼ばれただけのことはある。

「でも、なんで勉強を？」

雄二は『勉強なんてできなくてもやっていける』ということを証明したくてAクラスに勝負を挑んだはずだけど。それを覆しても負けられない理由でもあるのだろうか？

「前に、翔子に聞かれたんだ」

「何を？」

「……………式はどこで挙げたいか、と」

霧島さんは本当に一途いちずだなあ。

「俺はもう負けられない！ 次で勝たないと、俺の人生は！ 俺の人生は…………！」

「雄二落ち着いて！ きつと幸せな家庭を築きずけるから！」

暴れだしそうになる雄二を羽交はがい絞しめにする。

なるほど。道理であの雄二が勉強を頑張るわけだ。

「そろそろ開始してもらえますか？」

木内先生が困った顔で僕らを見る。相手の二人も少し呆れ顔だ。

「あ、すいません。もう大丈夫ですから。ホラッ」

「婿入りむこは嫌だ…………。霧島雄二なんて御免ばこあつ！ はっ！？」

とりあえず殴って正気に戻らせる。壊れた雄二の修理法、その2だ。

「若干不安もありますが、とにかく始めてください」

そう告げると、木内先生は僕らから若干距離を取った。

対戦相手の二人と向かい合い、勝負が始まる。

「律子！」

「真由美！」

「行くわよ！」

向こうの二人は名前を呼び合って頷き、僕らを挟み込むように移動してきた。

「へえ」。結構息が合っているね」

「そのようだな。オンナノコの仲良しごっことしては、それなりに良くできているな」

こちらも雄二と頷き合う。

「し、失礼ね！」

「私たちのチームワークは最強よ！」

少々怒った様子で反論してくるBクラスコンビ。

やれやれ。そこまで言うなら 本当のコンビネーションという

ものを見せてあげようか。

「雄二っ！」

相棒に目で合図を送る。僕らの仲だ。言いたいことは伝わっているはずだ。

「明久っ！」

向こうからの返事に僕も頷く。そして息を大きく吸って、それぞれの意見を口にした。

「「ここは任せたっ！」」

意見は一致。

僕らは二人揃って大きく飛び退った。

「って雄二！ お互い相手に任せてどうするのさ！」

「いや、ここは明らかにお前の出番だろう！ 俺は前の試召戦争で召喚をしたことがないんだぞ！？」

「なっ、なんて使えない男なんだ！ それならせめて僕の盾になれ！」

「使えないとはなんだ！ お前なんて点数がゴミみたいなもんじゃないか！」

「言っただな！？ 上等だ！ 表に出ろ！」

「望むところだ！」

お互いに胸倉を掴み合う。まさかここまで馬鹿なヤツだとは思わなかった！

「男の子の仲良しって変わってるね……」

「私たち、女で良かったね」

はっ！ 凄く蔑んだ目で見られてる！

「……………あゝ、コホン」

間を取る為に、一つ咳払いをしてから相手に告げる。

「コンビネーションは五分五分というところか」

「「ええっ！？」」

敵の女子二人の声が重なる。なんだいその心外そうな顔は。

「でも、僕らには学力とは別の『知恵』というものがある！ コンビネーションは同等でも、知恵を使った作戦で僕らの勝ちが決まったようなものさ！」

「律子。あの人、あくまでもコンビネーションは同等ということにしたいみたいだよ？」



「気にしちゃダメ。アイツはちょっとアレな人なんだから」

「どんだん僕の評判が一つの方向に収束し始めているような気がするけど、」

「ひとまずそのことは考えないようにしよう。」

「雄二、例の作戦を発表してくれ！」

「隣の雄二に話を振る。ちなみに僕は作戦なんて何も考えていない。いいだろう。俺の作軌はこうだ」

「勿体ぶって雄二が作戦の内容を口にする。」

「明久が片方を引き付け」

「ふむふむ」

「その間に明久がもう一方を倒す」

「それ両方僕の仕事になってない？」

「雄二が楽をするだけの作戦のような気がする。」

「明久！　ここまでできたら小細工は無用！　真つ向勝負だ！」

「明らかに無策をこまかしているようにしか聞こえないけど了解！  
一人一殺で僕らの勝利だ！」

「お互いに自分の正面にいる敵に召喚獣を突っ込ませる。作戦なんて弱者が考えるものさ！」

「律子、どうしよう？」

「こんなバカ相手に私たちが負けるわけないわ！　受けて立ちましょう！」

「うんっ！」

「二対二ではなく、一対一が二つという構図になる。」

「僕の相手は律子と呼ばれていた髪の長い女の子だ。」

「やあっ！」

「敵が手にしている剣を振り下ろしてくる。」

「僕はその動きに合わせて召喚獣を一步だけ横に動かした。」

「このっ！」

避けられた為、今度は大きく横に薙<sup>な</sup>いで来る。

距離をよく測<sup>はか</sup>って、小さく一步後退。

「この、このおっ！」

ムキになって振り回してくる敵の剣を小さな動きで避けさせる。

「うっん……。なんだか弱いものいじめになっちゃいそうだ」

相手の動きはどう見ても召喚獣の扱いに慣れているわけではない。そういえばこの子、前の試召戦争でも姫路さんに一撃でやられていたな。

折角の実戦を早々に戦線離脱となったわけだし、慣れていなくても当然か。

とは言え、いつまで避けていても将<sup>らち</sup>があかないし、

「そろそろ いきますかあっ！」

大振りの攻撃を避けざま、木刀を握<sup>にぎ</sup>り締<sup>し</sup>めて僕の分身は攻勢に転じた。

「え？ わっ！ きゃあっ！」

僕の場合は敵の鎧の隙間を狙<sup>ねら</sup>って的確に攻撃を叩き込まないと効果が無い。

一息<sup>みけん</sup>で眉間<sup>くびすじ</sup>、首筋<sup>もも</sup>、腿<sup>もも</sup>の三カ所を打ち据<sup>す</sup>える。

一撃が弱いなら手数で勝負だ！

……でも、改造制服を着て木刀で女の子を滅<sup>め</sup>多<sup>た</sup>打<sup>た</sup>ち<sup>う</sup>にしている光景<sup>けい</sup>って

どう見ても僕が悪役だよね……。

「ふはははは！ 無駄<sup>むだ</sup>無駄<sup>むだ</sup>無駄<sup>むだ</sup>あっ！」

なんか、遠くからはもつと悪役っぽい声が聞こえてきた。敵<sup>けいかい</sup>を警戒しながら目をやると

その先には拳で剣と渡り合っているおかしい召喚獣がいた。

メリケンサック、意外と強いのかもしれない。

「……教育者としては、坂本・吉井ペアにはぜひとも負けてもらいたいものです」

木内先生の呟きが聞こえてくる。

可憐な女子生徒がヤンキーにいじめられている光景でも連想したのだろう。

僕だって当事者でなければ、間違いなく向こうの味方だ。

「とどめっ！」

雄二の召喚獣が拳を敵の腹にブチ込む。

僕と違って高得点だから威力もあるのです、その拳は相手の鎧を貫いて本体に届いていた。

「それじゃ、僕も」

威力が低いとは言え、度重なる攻撃を受けてボロボロになった相手に渾身の一撃を叩き込む。これで終わりだ。

「くうっ！ 悔しいっ！」

「こんなのにも負けるなんてっ！」

相手の二人が揃って僕らを睨みつけてきた。

むう。こんなのって言われても。ちよっと傷つくなあ。

「……勝者、坂本・吉井ペア」

凄く不服そうに木内先生が勝者の名を告げる。とりあえず一回戦は突破だ。

「まずは一勝だな、明久」

「そうだね」

雄二が意外と戦力になるようでホッとした。さっきの戦闘も危なかったし

なんでも器用にこなす男だな。

「それじゃ、改めて」

「うん」

にこやかに向かい合い、お互いに手を差し出す僕ら。

「さっきの決着をつけるぞクソ野郎！」

「それはこっちの台詞だよバカ野郎！」

死闘を乗り越え、僕らの絆は更に強くなった。

- - - - - その数分後 - - - - -

既に上条達を待ち構えている対戦相手の姿があった。

Bクラス代表の根本君<sup>ねもと</sup>と、Cクラス代表の小山さん<sup>こやま</sup>。

この二人は付き合っているのだろう。

「所詮Fクラスなんだから、この勝負は貰ったようなものね」

なに！？正面切つて悪口を言ってくるなんて、小山さんは性格が悪いな。

こんなオンナノコを上条さんは見たことはありません！！

根本君は悪い噂がいっぱい流れてるし、嫌なカップルだ。

「では、召喚して下さい」

「『『『試獣<sup>サモン</sup>召喚！』』』」

この場にいる四人の生徒の召喚獣が出現する。

『 Bクラス 根本恭二 & Cクラス 小山友香  
数学 204点 & 192点 』

流石はBクラスとCクラスの代表コンビ。点数も立派なもんだ。

そして、もちろん俺らは素手、そして文月学園の制服。

『Fクラス 上条当麻 & Fクラス 御坂美琴  
数学 71点 & 649点 』

対する俺と御坂の点数が表示される

「な、なんでそんな点数が高いのよ!？」

「これでも今回は失敗しちゃったんだから感謝しなさいよね!」

「上条さんにはついていくことができない次元だ……」

「二人で上条とかいう奴をたたくぞ!」

「わかったわ!」

「なんで俺だけが狙われてんだ!？」

「バカだからだよ」「」

一方的に傷つけられてしまった上条。

「いくわよ!」

「ちよつと待った、あんたの相手は私よ!」

「く……っ!」

「僕が相手だよ!」

根本と上条の点数差は歴然、一瞬で終わるはずだった。だが、上条の点数は減らなかった。

「故障か!？」

根本の言葉に上条はニヤリと笑い、告げる。

「ああ、『故障』だ」

上条の召喚獣の右手が輝く。槍を止めた右手にはいつの間にか金色の籠手が装備されている。

根本はいったん、間合いをとった。

そして、走って来た上条の召喚獣に向かって槍を振り上げる。

「させるかよ!!」

一歩で間合いを詰めて槍の根元を掴む。

すると、何かが砕けたような音がして、槍は塵ちりになった。

「なに!？」

右手をそのまま握りしめ、殴る。

根本は少し吹っ飛ぶ。

「君の点数じゃ、ほとんどダメージを受けないね」

「そりゃ、どうかな？」

『Bクラス 根本恭二 & Cクラス 小山友香  
数学 133点 & 192点』

「な……っ!？」

「俺の召喚獣はバグっててな、右手で受けた攻撃は完全無効化オールキャンセルされんだ」

「ちなみに言うと、物体を殴る時の抗力や、相手と自分との点数の差キャンセルまで無効化されるんだ。だから、自分の持ち点分のダメージを直接与えられる」

「右手限定でな」

言葉と同時に左手で殴る。根本の蹴りを右手で防ぎ無効化キャンセル。

そのまま根本の足をすくって地面に倒す。腹を右手で殴る、すると  
抗力と点数差が無効化されたため腹の部分の鎧が塵になる。

『Bクラス 根本恭二 & Cクラス 小山友香  
数学 45点 & 192点 』

「ラスト!!」  
胸倉を掴み、上にあげて、思いっきり殴る。

『Bクラス 根本恭二 & Cクラス 小山友香  
数学 0点 & 192点 』

「さて、彼氏は戦死したけどどうする？」

「く……っ!! わたしが、Fクラスのバカに負けるわけないでしょ  
!」

「なるほど、それじゃあ仕方ない……」  
そう言って、御坂の召喚獣はブレザーのポケットからコインを取り  
出す。

小山は、それなりの速さで御坂に向かってくる。  
御坂はゆったりとした手つきで、ピン、と親指でのコインを真上へ  
弾き飛ばす。

ヒュンヒュンと回転するコインは再び親指に載って、

コインが放たれた。

ドン！！と音がした時にはもう小山の召喚獣は腹に穴をあけて仰向けで倒れていた。

『Bクラス 根本恭二 & Cクラス 小山友香  
数学 0点 & 0点 』

「うそっ……！」

「上条君と御坂さんの勝利です！」

「つかれた……」

「ほらっ、いくわよ！」

「へいへい」

と、いいながらも動かない上条。

御坂が上条の方へ歩いていく。

御坂はその時、自分の足で躓<sup>つまず</sup>いてしまった。

「うわあああ!？」

御坂が倒れそうになる。

「ちょ！おまつ!？」

上条がすんでの所で支える。

「うっ、ありが……」

上条と目が合った。

御坂は気づいてしまった。いま、上条の顔と自分の顔がほぼゼロ距離にあることに！





## 落涙の悪魔

なんで、教科が全部数学なのかというと書いてるのは一回戦だからです。これも、一回戦です。

「はぁ~~~~~つかれた~~~~~」

全身から眠気を振りまきながら歩いているこの男の名はライナ・リユートだ。

なぜ、こんなにも疲れているのかというと、相手がAクラスの代表だということだ

補充試験を受けてきたところなのだ。しかも全教科。しかも本気で

「ライナ、早く行くぞ」

「え~~~~~、やだよ」

シャッ!!という音がする。

「ん、どうした？」

「いや、なんでもないです」

「ん、そうか」

と、言い、コンパスを頸動脈けいどうみゃくから離す。

「仕方ない、やりますか」

と、言っ、闘技場へ向かった。

Aクラスの代表とそのパートナー。

それは、

二年生の筆頭コンビ、学年主席の霧島翔子さんと秀吉のお姉さんの木下優子さんだ。

この二人には島田のような弱点科目がない。厳しい勝負になるだろう。

「Fクラスコンビか……」

と、言ったのは木下優子さん

「おとなしくギブアップしてくれると嬉しいな。弱いものいじめは好きじゃないし」

と、言ってくる。

「だってよフェリス、やったじゃん。お言葉に甘えさせてもらおうぜ」

「バカが、ここで負けたら……」

「あー、はいはいわかってますよ」

そして、

「……試<sup>サモン</sup>獣召喚!」

この場にいる四人の生徒の召喚獣が出現する。

『Aクラス 木下優子 & Aクラス 霧島翔子

数学 362点 & 434点

VS

『Fクラス ライナ・リユート & Fクラス フェリス・エリス

数学 836点 & 158点

「「えっ!?!」」

木下さんとライナが同時に言う。

「あんたFクラスなのになんで教師を軽く超えてるのよ!!」

「代表とそのパートナーだから俺よりちよつと強いくらいかなあゝ  
ゝっておもったんだけどな」

「……こんなに強かったなんて!!」

「二人合わせても勝てないってどうゆうことよ!!」

木下さんは完全なパニック状態だ。

「……優子、弱い方を狙って。私が時間稼ぎをする」

「いや、ふたりでライナ・リュートを潰す!!」

「フェリス、休んでろ。どうやら二人で俺を潰しにくるみたいだ」

「ん、わかった」

と言い召喚獣を後ろへ下がらせる。そして、お茶を飲みだす。

「ライナ」

「んあ？」

「絶対に勝ってこい」

「はいはい」

二人はライナにすごい速さで向かってくる。

そして霧島が呟いた。

フルミラーシュ  
「……絶対不可視」

瞬間、霧島の召喚獣の姿が見えなくなった。

それどころか、木下さんも見えない召喚獣も同様だ。

「あーそうゆう能力ね。まあ、俺には関係ないか」

ミラーシュブレイド  
「……不可視刃」

「存在を解析、解除」

バリーン!!と音が鳴る。

「……うそ!？」

トンツ、と音した時にはライナの召喚獣の手は霧島の召喚獣の腕輪に添えられていた。

「存在を解析、解除」

次の瞬間、腕輪が粉々に砕けた。

「……なっ!？」

すぐに二人の姿は見えるようになった。

そしてライナが言う。

「じゃ、おれも。『フェルナ・リュートル落涙の悪魔』」

そして、空間に文字を書き込みながら唱える。

「求めるは雷鳴>>>稲光<sup>いづち</sup>」

雷が霧島の召喚獣を貫く。

「……くっ!!」

そのまま霧島の召喚獣の腕をひねり倒す。

『Aクラス 木下優子 & Aクラス 霧島翔子  
数学 362点 & 0点』

「代表!!」

そしてライナが「ゴメンな」と言う。

「稲光」

『Aクラス 木下優子 & Aクラス 霧島翔子  
数学 0点 & 0点』

「ライナ君とフェリスさんの勝利です!!」

「ちっ、侵食してきたか」と、言った。

アドバイスお願いします。

## 幻の生徒

坊主男とモヒカン男が呆然としている。

あまりの驚きに声すら出ない。といった体だ。

「つ、常村、相手は一人であの点数だよな？」

「夏川、これは勝てねえ。諦めねえと」

「バ、バカ！推薦状がかかってんだ。負けられねえだろ」

「須川って方をやれば……」

「片方だけやつても意味ねえだろ！」

『Aクラス 常村勇作 & Aクラス 夏川俊平

数学 209点 & 197点 』

彼らの点数は、誇っていい点数だった。Aクラスという点もまた同じく。

しかし、彼らは敵を恐れていた。

Aクラスの中でも中堅か副将くらいの点数だ。

そんな彼らが恐れているのは一人の青年だった。

クラスは2 - F、『アノウンチンバー出席番号零』の異名を持つ青年だ。

理由はクラスに居る所をだれも見ることが無いから。

しかも、その青年の名前は文月学園創立2年目から2 - Fにある。

ずっと留年していた青年。だが、バカではない。むしろ天才だ。

この青年は別の異名、そして伝説を持っている。どちらかということこっちの方が有名だ。

「オールサウザンドオーバー全教科完全攻略……。マジでいたのかよ」

全教科完全攻略。名前の通りの異名だ。

全教科で1000点以上の点数を確保している男。勝てぬものなどいない。

『さて、あなたたちにはここで消えてもらいます』

『い、行くぞー!!』

「勝って、受験勉強とおさらばだー!!」

ここで、はじめて二人は青年、いや2・Fの御剣神哉<sup>みつぬ じんや</sup>の点数を見た。

『Fクラス 御剣神哉 & Fクラス 須川亮

数学 1179点 & 57点

』

「勝てねえ……」

「やるしか……っ!!」

『ゴッド・オブ・スキル

神次元操作!』

「な、なんだ!?!うわああ!!」

「く、来るな!?!うおおお!!」

『Aクラス 常村勇作 & Aクラス 夏川俊平

数学 0点 & 0点

』

一瞬で勝負がついた。圧勝だ。

「御剣さん、ホントにいいのか?俺がパートナーで」

『はい、約束を守ってくれば問題無いですよ』



そして御剣は言う。

『吉井さんと坂本さんのペアにだけは負けないといけませんからね』  
『え』

それから数分後……

「明久に雄二。殴り合いなぞしておらんで、急いで教室に来てくれるかの？」

相棒と友情を確認し合っていると、校庭の特設ステージに秀吉がやってきた。

少し息が弾<sup>は</sup>んでいるところを見ると、急いでいるみたいだ。

「あれ？ 喫茶店で何かあったの？」

「うむ。少々面倒な客がおつての。すまぬが話は歩きながらで頼む」

「あ、うん。了解」

先を急ぐ秀吉に続く僕と雄二。どうやらトラブル発生と見て間違いなさそうだ。

「……営業妨害か？」

歩いている雄二の目が細くなる。

学園長のところに行った時と同じ目つきだ。何か思うところがあるのだろうか。

「あはは、まさか。学園祭の出店程度で営業妨害なんて出てこないんじゃない？ そんな真似をしたところで何のメリットもないと思うよ」

せいぜい僕らが大会に集中できなくなるとか、そういった程度だ。  
「いや、それが雄二の言ったとおりなんじゃ」

秀吉の端整な顔が歪む。まさか本当に営業妨害？

「そうか。相手はこのどいつだ？」

「うちの学校の三年じゃな」

しかもよりによって三年生か。まったく、生徒の中では一番大人のくせに。

「ま、そういうトラブルなら雄二にお任せだね。チンピラにはチンピラを充てるのが一番だよ」

実際に雄二は腕っ節も強いし、こういうことにはうってつけた。

「それが人にものを頼む態度か？ …… まあいい。喫茶店がうまくいかなければ、明久の大好きな姫路が転校してしまうからな。協力してやるう」

「べっ！ 別にそんなことは一言も……！」

「あー。わかったわかった」

「その態度は全然わかってない！」

再三に渡ってからかってくる雄二に文句を言いながら歩く。

すると、教室近くとは言え、廊下にまで響く大声が聞こえてきた。

「む。あの連中じゃな」

「じゃ、ちよつくら始末してやるか」

首をコキコキと鳴らしながら教室の扉に手をかける雄二。

本当、こういったことには減法強いよなあ。

「マジできつたねえ机だな！ これで食い物扱っていいのかよ！」

雄二が扉を開けるなり耳に飛び込んだ罵声。<sup>ばせい</sup>

「どうやらクロスで覆い隠したみかん箱がお気に召さなかったらしく  
クロスを剥がして文句を言っていた。」

なるほど。絵に描いたようなチンピラだ。

『うわ……確かに酷いな……』

『クロスで誤魔化していたみたいね』

『学園祭とは言っても、一応食べ物のお店なのに……』

その様子を見たお客さんが口々に<sup>つぶや</sup>呟く。

マズい。喫茶店でこの悪評はかなりの痛手<sup>いたで</sup>だ。

「雄二、早くなんとかしないと経営に響くよ」

「そうだな……。秀吉、ちょっと来てくれ」

「？ なんじゃ？」

「至急用意してきて欲しいものがあるんだ」

雄二が秀吉に耳打ちする。秀吉に頼むってことは、演劇用の小道具  
具が何かだろうか？

「一応用意はできるが……。あっても二つ程度じゃぞ？」

「それで充分だ。その後はまた他から調達してくるさ」

「了解じゃ。すぐに戻る」

そう言い残して、教室内のクラスメイト数名に声をかけて秀吉は  
足早に去って行った。

「明久。お前はあの小悪党<sup>こあくちやう</sup>どもの特徴をよく覚えておけ」

僕にはそう指示を出し、雄二はクレマーにのっしのっしと近付  
いていった。

「？ よくわかんないけど、了解」

あとで報復でもするつもりなんだろうか。とりあえず言われたと  
おり相手の特徴を覚えておこう。

営業妨害をしているのは二人。

いずれも男だ。片方は中肉中背の一般的な体格と、小さなモヒカン  
という非一般的な髪型をしている。もう一方も175センチくらい  
の普通の体格で、

こちらは丸坊主だ。なんとも覚え易い髪型の二人だなあ。

「まったく、責任者はいないのか！ このクラスの代表ゴペツ！」

「私が代表の坂本雄二です。何かご不満な点でも御座いましたか？」  
ホテルのウェ이터のように恭しく頭を下げる雄二。

話しかける前に相手を殴り飛ばしていなければ、まるで模範的な責任者のようだ。

「不満も何も、今連れが殴り飛ばされたんだが……」

殴られていないソフトモヒカンの男が驚いている。

無理もない。僕だっていきなり友達が殴り飛ばされたら驚くだろう。

「それは私のモットーの『パンチから始まる交渉術』に対する冒涇（ぼうとう）ですか？」

凄（すご）い交渉術だ。

「ふ、ふざけんなよこの野郎……！ なにが交渉術ふぎやあつ！」

「そして『キックでつなぐ交渉術』です。最後には『プロレス技で締（し）める交渉術』が待っていますので」

「わ、わかった！ こちらはこの夏川（なつかわ）を交渉に出そう！ 俺は何もしないから交渉は不要だぞ！」

「ちょ、ちよつと待てや常村（つねむら）！ お前、俺を売ろうと言うのか！？」

慌（わ）てているのは坊主頭の夏川と呼ばれた男。

覚えにくいから、『夏坊主、常モヒカン』で覚えよう。

「それで常夏（とこなつ）コンビとやら。まだ交渉を続けるのか？」

あ、雄二の仮面（かめん）が外（はず）れた。

どうやら慇懃（いんぎん）な態度はあまり継続（けいぞく）しないみたいだ。

それにしても、常夏コンビとは巧（うま）い命名（めいめい）だ。座布団一枚。

「い、いや、もう充分だ。退散（たいさん）させてもらっ」

常村先輩（とねむら）が雄二（けんのん）から剣呑（けんおん）な雰気（ふんき）を感じ取（と）って撤退（てつたい）を選ぶ。  
賢明（けんめい）な判断だ。

「そうか。それなら」

大きく頷（うなづ）いた後、夏川（坊主頭）先輩の腰を抱え込む雄二。

「おいっ！ 俺もっ何もしてないよな！？ どうしてそんな大技（だいぎ）をげ

ぶるあつ！」

「これにて交渉は終了だ」

バックドロップを決めて平然と立ち上がる。できればあの交渉術は門外不出であって欲しい。

「お、覚えてるよっ！」

倒れた相棒を抱えて走り去っていくモヒカン先輩。これで問題は片付いた。

『流石にこれじゃ、食っていく気はしないな』

『折角美味しそうだったんだけどね』

『食ったら腹壊しそうだからなあ』

というわけにはいかなかった。

クロスの中を目の当たりにし、ガタリ、と音を立てて一人目が席を立つ。

あれは教頭の竹原先生か。うちのクラスに来てくれていたのか。

こういった催し物が好きそうには見えなかったけどなあ。

『店、変えるか』

『そうしようか』

「あ、お客さん！」

一人目が席を立つと、次々とお客さんが席を立つてしまう。

集団心埋ってやつだろう。こうなると悪評は風に乗るように学校中に広がってしまう。

「失礼しました。こちらの手違いでテーブルの到着が遅れていたの  
で、暫定的にこのような物を使ってしまうました。ですが、たった  
今本物のテーブルが届きましたのでご安心下さい」

そんなお客さんたちに深々と頭を下げる雄二。

その後ろには、秀吉や他に男子数名が立派なテーブルを運んでいる  
姿がある。

あれは……演劇部で使っている大道具のテーブルか。

なるほど。こうしたらお客さんの目の前できちんと衛生面を改善し  
た姿を見せられる。

雄二も一応風評について考えていたみたいだ。

「あれ？ テーブルを入れ替えてるの？」

そんな時、後ろから女子の声が聞こえてきた。

「あ、おかえり。美波に姫路さん。一回戦はどうだった？」

「勝てませんでした」

姫路さんが落ち込んでいる。

「姫路さんが負けた！？」

姫路さんの点数は十分高い。というよりAクラスに入れる程の実力を持っている。

その姫路さんが負けた！？何かあったのかな？

「姫路さんもしかして何かトラブルがあって……」

その言葉を姫路さんが遮る。

「普通に実力で……」

そんなバカな。そんな点数の奴がいるのか。

「相手は誰だったの？」

美波が答える。

アクセラレータ

「一方通行よ」

「そんな、だってあいつは僕と同じくらいの点数だったはずだよ！？」

「でも違った。あいつは実力を隠していたのよ。だって700点台だったわよ」

そうだったのか。

「明久君、頑張って2回戦勝ってください！」

そんなに勝負にこだわる性格じゃなかったと思うけど、今回は場合が場合だ。

勝ちにこだわるのは当然だろう。

「ねえねえ、テーブルを入れ替えちゃってもいいの？ 演劇部に  
あるテーブルなんて、そこまで多くはないはずでしょう？」

美波の指摘ももっともだ。

さつき秀吉も二つ程度しかないと言っていたし、

かといって残りのテーブルをそのままというワケにもいかないし……。

「それでは、他のテーブルも届き次第順次入れ替えさせていただきます  
ので、ご利用中のお客様はひとまずこちらのテーブルにお移りの上、  
ごゆっくりとおくつろぎ下さい」

そう締めて、雄二は僕らのいる廊下まで戻ってきた。

「ふう。こんなところか」

小さく息をつく。慣れない丁寧語で疲れたのかもしれない。

「お疲れ、雄二」

「何があったのかわからないけど、お疲れ様」

「お疲れ様です」

「おう。姫路に島田<sup>しまだ</sup>か。その様子だと負けてしまったみたいだな」

相当驚いている様子。この二人なら勝てると確信していたんだろう。

「そうなの、それより、喫茶店は大丈夫なの？」

さつきの騒動でお客様は減ってしまったし、悪評だって流れる  
だろう。

喫茶店も姫路さんの転校に関わる大切な要素だ。失敗するわけには  
いかない。

「このまま何も妨害がなければ問題ないな」

何か引つかかる言い方だ。まるでこの後も妨害があることを予想  
しているような……。

「あの、持ってくるテーブルは足りるんですか？」

「ああ、それが。そうだな。明久、二回戦まではあとのくらい  
時間がある？」

腕時計を見て確認する。僕らの二回戦は十一時開始だから

「小一時間つてところかな」

「そうか。あまり時間がないな……。ちゃっちやと行くか。明久、ついて来い」

雄二が僕に向かってクイクイ、と指を動かす。

「ウチらは手伝わなくてもいいの？」

指名を受けなかった美波が尋ねる。どうやら美波も姫路さんの為に頑張ってくれる気のようなのだ。

こういった心遣い<sup>こころづかい</sup>が、なんだか凄く嬉しい。

「お前らは喫茶店でウェイトレスをやっていてくれ。落ちた評判を取り戻す為に、笑顔で愛想よく、な」

「はいっ！ 頑張りますっ！」

姫路さんも当然やる気充分。いいなあ……。僕も客として入って笑顔を振りまいてもらいたいよ。

「おい明久。行くぞ」

「あ、うん。でもどこに行くのさ？」

呼び止めると、雄二は悪そうに口の端を吊り上げて、

「テールブル調達だ」

悪そうな笑みを浮かべた。

- - -  
- - -  
- - -  
- - -

アドバイスよろしくお願いします。





## 疑惑の勝利

吉井君に坂本君！ 今日という今日は、許しませんよ！」

「明久、走れ！ 捕まったら生活指導室行きだぞ！」

「鉄人の根城！？ 冗談じゃない！」

布施<sup>ふせ</sup>先生に追われながら、僕と雄二は必死に廊下を走っていた。何故走っているのか？ それはそこに階段があるから というワケではなく、

「せっかくパクったテーブルだ！ 落として壊すなよ！」

「わかってるよ！」

学園の応接室からテーブルを盗んできたからだ。

「それにしても、どうして、テーブルを背負って、そんなに早く、走れるんですか……」

これは布施先生の後ろから追ってきている長谷川先生の台詞。

先生は体育の授業がないから運動不足なのかな？

「とにかくいったん喫茶店に使っちゃえばこっちのモンだ！ 一般客が使用中のテーブルを回収なんて真似は、いくら教師でもできないだろうからな！」

この極悪人め。おかげで一緒にいる僕までどんどん評価が下がっていくじゃないか。

「こうなったら、西村先生に応援を」

布施先生が携帯電話を取り出す。

西村って言うと、鉄人か！ この状態で鉄人から逃げ回るのは至難の業だ！

「明久！」

「あいよっ！」

走りながら足で上靴<sup>うわくつ</sup>を片方脱ぎ、雄二に向かって蹴り上げる。  
「くらえっ！」

「うわっ！」

その上靴を雄二が空中で蹴る。

そしてシュートは狙い違<sup>たが</sup>わず布施先生の手元に命中。携帯電話は宙を舞って廊下に転がった。

「それでは御機嫌よう、先生方！」

「ああつ。僕の上靴……」

布施先生が携帯電話を拾っている間に僕らは全力ダッシュ。

姿が見えなくなったところでテーブルを放置して、秀吉の携帯にその置き場所をメールする。

これで回収班が動いて喫茶店に持って行ってくれるはずだ。

「よし。次は職員室そばの休憩室を攻めるぞ！　それが終わったら二回戦だ！」

「はあ。僕と雄二はいつか停学になる気がするよ……」

学園内をテール泥棒として駆け回ったおかげで、テーブルの目標数を確保することには成功した。

これで悪評の元も消えたし、喫茶店の方は問題ないだろう。

「で、二回戦の相手はどんな連中？」

特設ステージに向かいながら、隣を歩く雄二に聞く。

時間ギリギリまでテール奪取<sup>たっしゅ</sup>作戦をやっていたせいで、二回戦の相手を調べる暇さえなかった。弱そうな相手だといんだけど。

「対戦表を見た限りだと、勝ち上がってきそうなのは　なっ！？」

うそだろ」

雄二の目線を追う。すると、その先には既に僕らを待ち構えている対戦相手の姿があった。

「かつ、上条!？」

「吉井かよ!？」

二人は驚いていた。

「バカなはずなのに!」「」

「いや、どっちもどっちだろ」

ここで御坂が、

「どんぐりの背比べね……」

と、ため息交じりに言う。

「それでは、試験召喚大会二回戦を始めてください」

今回の立会人は、多少のことには目を瞑ってくれる英語担当の遠藤先生だ。

「……試験召喚!」「……」

この場にいる四人の生徒の召喚獣が出現する。

『Fクラス 上条当麻 & Fクラス 御坂美琴  
英語W 52点 & 403点』

み、御坂さんってそんなに頭良かったの!？

『Fクラス 坂本雄二 & Fクラス 吉井明久』

「く……っ！御坂の頭が良かったことは計算外だったっ！」  
そんな時、御坂と上条は小声でこんな話をしていた。

「（御坂、もつと点数を下げてこいって言っただろ）」

「（し、仕方ないでしょ！ニアミスって感じの答えが思い浮かばなかったんだから）」

「（そういうときは全部に this is the pen について書いときゃいいんだよ）」

「（……あんたそれ本気で言ってる？ this is a pen よ。）」

「（うそ！？初耳なんですが！？）」

「（はあ、正真正銘バカなのね）」

こんなやりとりをしていた。

「雄二、勝つしかないんだ。行くよ！」

明久が飛び出す。

木刀を振り上げて斬ろうとする、上条はとっさに右手で防ごうとする。

そこを御坂が、

「右手を使わない！！」と言った。

「だーもう、だらっしやああ！！」

強引に右手を引いて左手をつき出す。しかし、そこに木刀はない。  
「もらった！！」

軌道は縦切りから横薙ぎに変わっていた。

「うおお！？」

あばらに打ちこむ。上条は右手を出そうとしてやめる。

左手で木刀を掴もうとするが明久は上条の右側に抜けた後。

上条が振り向いた直後に喉元を貫く。急所なので即死だ。

『Fクラス 上条当麻 & Fクラス 御坂美琴

英語W 0点 & 403点 』

「よし、勝ったな」

「つぎは御坂さ「私たちの負けよ」えっ？」

「どういうことだ？」

雄二が訝<sup>いぶか</sup>しむ。

それもそうだ。僕だって気になる所だ。

「味方が戦死したのに見捨てられるほど非人道的な人間じゃないのよ」

ああ、なるほど。

「でも召喚者に実害はないはずじゃないの？」

僕みたいに観察処分者じゃなければ。

「こいつの召喚獣はバグってんのよ」

「なるほど、観察処分者じゃなくてもフィードバックが来るのか」

「その通り。でもメリットもあるけどね」

「そのメリットはなんなんだ？」

御坂が言う。

「召喚フィールド内での物理干渉能力、80%のフィードバック」

「「80%だつて!？」」

冗談じゃない。観察処分者でさえ10%のフィードバックなのになんで80%も!

「なんでかって言うところこいつのもうひとつのバグがあるからよ」

「さて、今聞いた限りメリットがひとつも無いんだが」

「次が本当のメリットよ」

「召喚フィールド内での抗力、点数差の無効化」

「っ!!」

「？」

「どういう意味？」

「明久てめえはとことんバカだな。要するに上条の点数が相手にそのまま与えられるつつうことだ」

「それはすごい!!」

「まあ、そういうこと」

「といって御坂は上条を引きずりながら帰って行った。

しかし雄二は険しい顔をしていた。

「（負け方が不自然すぎる。まるで負けなきゃいけなかったような負け方）」

「（最初の小声の話も気になる。少し尾行してみるか）」

「よし」

「雄二、どうしたの？」

雄二は口元を歪める。

「あいつらを尾行する」

「まさか雄二に御坂さんを尾行するような趣味があったとは……」  
「ねえよ!!」

- - - 数十分後 - - -

「ただいまー……って、あんまりお客さんがいないなあ……」

テーブルが綺麗になったにも関わらず、喫茶店内にお客さんは殆どいなかった。

「お、戻ってきたようじゃの……ってなんでお主らは顔の面積が広くなっておるのじゃ？」

「ちよつとね、いろいろあつたんだよ」

実際の所は御坂さんに尾行がバレてフルボッコにされたんだけどね。あまり仕事が無いようで、ウェイトレス役の秀吉も暇そうだ。

「無事勝ってきたよ」

「それは何よりじゃ。ところで、雄二の姿が見えんが？」

「うん。トイレに寄ってくるってさ」

喫茶店が気になると言っていた割には暢気なもんだ。

「それより秀吉、これはどういうこと？ お客さんがいないじゃないか」

「……むう。ワシはずっとここにおるが、妙な客はあれ以降来ておらんぞ？」

秀吉が首を傾げる。

「ってコトは、教室の外で何かが起きているのかな？」

「かもしれないのう」

そうやって二人で考え込んでいると、

『お兄さん、すいませんです』

『いや。気にするな、チビッ子』

『チビッ子じゃなくて葉月ですっ』

雄二と小さな女の子の声が聞こえてきた。



## 破壊の右手、創造の左手

雄二と小さな女の子の声が聞こえてきた。

「雄二が戻ってきたようじゃな」

「あ、うん。そうみたいだね」

はて、葉月……？ あの声、どこかで聞いたことがあるような……？

「んで、探しているのはどんなヤツだ？」

ガラツと音を立てて教室の扉が開き、雄二の姿が見えた。

話し相手の子は小柄なのか、雄二の陰になって姿が見えない。

「お、坂本。妹か？」

「可愛い子だな。ねえ、五年後にお兄さんと付き合わない？」

「俺はむしろ、今だからこそ付き合いたいなあ」

二人はあつという間にクラスの野郎どもに囲まれてしまった。

お客さんがいなくて暇なせいだろう。

「あ、あの、葉月はお兄ちゃんを探しているんですっ」

どうやら女の子は人を探していて雄二に声をかけたようだ。

雄二のヤツ、なんだかんだ言っただ面倒見が良いからなあ……。

「お兄ちゃん？ 名前はなんて言うんだ？」

「あう……。わからないです……」

「？ 家族の兄じゃないのか？ それなら、何か特徴は？」

名前がわからない相手でも探してあげようという雄二の温かい気遣いを感じられる。

意外と子供好きなのかもしれない。

「えっと……バカなお兄ちゃんでした！」

なんとも凄い特徴だ。

「そうか」

雄二が首を巡らせて、該当する人物を探している姿が人垣の間から見える。

『……沢山たくさんいるんだが？』

否定できない。

『あ、あの、そうじゃなくて、その……』

『うん？ 他に何か特徴があるのか？』

『その……すつごくバカなお兄ちゃんだったんです！』

『『吉井だな』』

やだな、泣いてないよ？

『全く失礼な！ 僕に小さな女の子の知り合いなんていないよ！

絶対に人違い。』

『あつ！ バカなお兄ちゃんだつ！』

小さな子が駆けかけてきて、いきなり抱だきつかれた。

『絶対に人違い、がどうした？』

『……人違いだと、いいなあ……』

最近、周りの皆があまりにも僕のことをバカだつて言うから、

少しずつ自分がバカに思えてきたよ。

『って、キミは誰？ 見たところ小学生だけど、僕にそんな歳の知

り合いはいないよ？』

ひとまず顔を見る為に女の子を引き剥はがす。

『え？ お兄ちゃん……。知らないって、ひどい……』

女の子の表情が歪ゆがむ。あ、マズい！ 泣かせちゃったかも！？

『バカなお兄ちゃんのバカあつ！ バカなお兄ちゃんに会いたくて、

葉月、一生懸命『バカなお兄ちゃんを知りませんか？』って聞きな

がら来たのに！』

なんだろう。僕まで泣きたくなってきた。

『明久 じゃなくて、バカなお兄ちゃんがバカでごめんな？』

『そうじゃな。バカなお兄ちゃんはバカなんじゃ。許してやってく

れんかのう？』

ここまでバカを連呼れんこされた人間はそうはいないだろう。

『でもでも、バカなお兄ちゃん、葉月と結婚の約束もしたのに。』

『瑞希！』

「美波ちゃん！」

「「殺るわよ！」」

「「ごぶあつ！？」」

突如首筋に激痛が！　なんだ！？　何が起こったんだ！？

「瑞希。そのまま首を真後ろに捻<sup>ひね</sup>つて。ウチは膝<sup>ひざ</sup>を逆方向に曲げるから」

「こ、こうですか？」

「いかん。殺されかねん。」

「ちよつと待って！　結婚の約束なんて、僕は全然　」

「ふえええんっ！　酷<sup>ひど</sup>いですっ！　ファーストキスもあげたのにーっ！」

「坂本は包丁を持ってきて。五本あれば足りると思う」

「吉井君、そんな悪いことをするのはこの口ですか？」

「お願いひまふっ！　はなひを聞いてくらはいつ！」

いつもは優しい姫路<sup>やましろ</sup>さんまで！

クラスから幼女暴行犯が出たと知られたら即転校に結びついちゃうからだろうけど、

この扱いはあんまりだ！

「仕方ないわね。二本刺したら聞いてあげるからちよつと待ってなさい」

「あのね、美波。包丁って一本でも刺さったら致命傷<sup>ちめいしやう</sup>なんだよ？」

美波に足りないのは日本語力だけじゃないと思う。

「あ、お姉ちゃん。遊びに来たよっ！」

と、女の子が美波を見て涙を引<sup>ひ</sup>き込める。

お姉ちゃん……葉月ちゃん……ファーストキス……

「ああっ！　あのときのぬいぐるみの子か！」

思い出した！

そういえば、前に小さな女の子がお姉ちゃんにプレゼントをしたいけどお金が足りない。

なんて哀しそうにしてたから手伝ってあげたんだけ。

あげたのは確か、大きなぬいぐるみだったかな？

その後観察処分者に認定されたりして色々とバタバタしてたから、すっかり忘れていたよ。

「ぬいぐるみの子じゃないです。葉月ですっ」

女の子がぶうつと頻<sup>ほお</sup>を膨<sup>ふく</sup>らませる。

「そっか、葉月ちゃんか。久しぶりだね。元気だった？」

「はいですっ！」

「うんうん。それは良かった。それにしても、よく僕の学校がわかったね？」

「お兄ちゃん、この学校の制服着てましたから」

そう言っ僕<sup>ぼく</sup>の制服を引っ張る葉月ちゃん。

「あれ？ 葉月とアキって知り合いなの？」

そんな様子を見て美波が首を傾げていた。

「うん。去年ちよつとね。美波こそ葉月ちゃんのこと知ってるの？」

「知ってるも何も、ウチの妹だもの」

「へ？」

マジマジと葉月ちゃんの顔を見る。言われてみると、確かに似ている……。

元気そうな雰囲気とか、ちよつと勝気な目のあたりとか。

「吉井君はずるいです……。どうして美波ちゃんとは家族ぐるみの付き合いなんですか？ 私はまだ両親にも会ってもらってないのに……。もしかして、実はもう『お義兄<sup>にい</sup>ちゃん』になっちゃってたり……」

姫路さんは何を言っているんだろう？

最近、彼女もたまに壊れているような気がする。これもボロい教室のせいだろうか。

「あ、あの時の綺麗<sup>きれい</sup>なお姉ちゃん！ ぬいぐるみありがとうでしたっ！」

葉月ちゃんがぺこりとお辞儀をする。礼儀正しい子だ。学園長とは大違いだ。

「こんにちは、葉月ちゃん。あの子、可愛がってくれてる？」

「はいですっ！ 毎日一緒に寝てます！」

ぬいぐるみ？ 毎日一緒に寝ている？

姫路さんも葉月ちゃんに何かぬいぐるみでもあげたんだろうか。

美波とは姉妹らしいから、姫路さんはその関係で遊びに行ったときにでも知り合ったのかな。

「良かった。気に入ってくれたんだ」

そう言っほほえて嬉しそほほえうに微笑む姫路さん。なんだか僕の周りには子供好きの人が多いな。

僕も嫌いじゃないけど、どう接したら良いのかわからないので羨ましく思える。

「ところで、この客の少なさはどういうことだ？」

と、教室内を見回す雄二。そういえば僕もそれを考えていたんだった。

葉月ちゃんの登場ですっかり忘れてたよ。

「そういえば葉月、ここに来る途中で色々な話を聞いたよっ」

「ん？ どんな話だ？」

雄二が屈み込んで葉月ちゃんの目線に合わせる。

「えっとね、中華喫茶は汚ちゅうつかきつさいから行かない方がいい、って」

葉月ちゃんの言葉に、僕は思わずうめき声をあげそうになった。

確かにさっきまではクロスの下が汚かったけど、それはもう解決したはずだ。

それなのに未だに噂が回っている。どうしてそこまで悪評が流れているんだろう。

「ふむ……。例の連中の妨害ぼうがいが続いているんだろうな。探し出してシバき倒すか」

口元に手を当て、まるで確信しているかのように雄二は断言した。「例の連中の妨害って、あの常夏コンビ？ まさか、そこまで暇じゃないでしょ」

なにより、坊主先輩はバックドロップまで食らったんだ。これ以

上何かをしてくとは思えない。

「どうだかな。ひとまず様子を見に行く必要があるな」

「そうだね。少なくとも、噂がどこから流れてどこまで広がっているのかを確認しないと」

こんなに小さな葉月ちゃんが聞いたくらいだから、もしかするとかなりの勢いで広まっているのかもしれない。

「お兄ちゃん、葉月と一緒に遊びにいこっ」

ギョツと葉月ちゃんに手を握られる。

困った。普通に楽しむだけの学園祭だったらいくらでも一緒に遊んであげられるんだけど。

「ごめんね、葉月ちゃん。お兄ちゃんはどうしても喫茶店を成功させなきゃいけないから、あんまり一緒に遊べないんだ」

言いながら素月ちゃんの頭を撫でてみる。

「むゝ。折角会いに来たのに」

葉月ちゃんの頬は不満げに膨れてしまった。

けど、喫茶店は姫路さんの転校にかかわる大事なことだ。

後悔のないように全力を尽くしておきたい。

「それなら、そのチビツ子も連れて行けばいい。飲食店をやっている他のクラスを偵察する必要もあるからな」

そこで雄二のフォローが入る。それももつともだ。敵情視察は経営戦略の基本だしね。

「んゝ、そっか。それじゃ、一緒にお昼ご飯でも食べに行く？」

「うんっ」

膨れ顔が一転して満面の笑みに。表情が豊かで面白いな。

天真爛漫てんしんらんまんってこういう子のことを言うのかな？

「じゃあ葉月、お姉ちゃんも一緒に行くね」

美波の口調がいつもとは全然違う。妹に対しては優しいお姉ちゃんおねえちゃんでいるんだなあ。

「ふむ。ならば姫路と雄二も一緒に行くと良いじゃろ。召喚大会もあるじゃろっし、早めに昼を済ませてくると良い」

「そうか。悪いな、秀吉」

「いいんですか？　ありがとうございます。木下君<sup>きのした</sup>」

これで雄二と姫路さんも一緒ということになった。全部で五人。混雑する学園祭の中を歩き回るには結構な人数だ。

「それでチビツ子、さっきの話はどの辺で聞いたのか教えてくれるか？」

「えつとですね……短いスカートを穿<sup>は</sup>いた綺麗なお姉さんが一杯いるお店」

「なんだって！？　雄二、それはすぐに向かわないと！」

「そうだな明久！　我がクラスの成功のために、（低いアングルから）綿密<sup>めんみつ</sup>に調査しないと！」

聞いた瞬間全力ダッシュ。

喫茶店は姫路さんの転校にかかわる大事なことだ！　後悔のないように全力を尽くしておきたい！

「アキ、最低」

「吉井君、酷いです……」

「お兄ちゃん**の**バカ！」

背後からの罵倒<sup>はとつ</sup>も気にならないほどに、僕の心は躍<sup>おど</sup>っていた。

雄二は走っている最中にあることを考えていた。

御坂を尾行したときに上条はあるキーワードを言っていた。

『イマジンプレイカー』

おそらくこれが上条の召喚獣にあるバグの正体だ。

そして御坂は『坂本のペアには負けなきゃいけなかった』という風に言っていた。

もうひとつ上条には能力があるらしいが全く分からなかった。

そんな考え事をしてる時、一人の青年とすれ違った。その刹那に。

『上条さんのもう一つの能力は『イマジネイカー幻想創り』ですよ』

なんて言われてしまった雄二はその場で立ち止まる。

『どういうことだ?』

『どういうことも無いですよ。そのままの意味です』

『なぜ知っている』

『なぜもなにも僕が手伝ったんですから』

『手伝った?』

『そう、上条さんの手伝いをしたんですよ』

雄二はこの青年のことをひとまず信用することにした。

『(まあいい、ガセだったら縁を切ればいい話だ)』

『ひどいなあ、切り捨てるつもりなんて』

「っ! まあいい、できればあいつの狙いとかを根掘り葉掘り、知ってる限り聞かせてもらおうか」

『僕が教えるのは2つだけです。1つ目、上条さんの能力は2つ』

『そして2つ目、』

耳元に声が近付く、そして。

『あなたはオカルト側の人間だ』

『どういつこ...』

青年はどこかへ消えていた。

「ちっ!」





## 血戦開始

「明久、ここはやめよう」

「ここまで来て何を言っているのさ！ 早く中に入るよ！」

「頼む！ ここだけは、Aクラスだけは勘弁してくれ！」

目的の桃源郷は、我らが宿敵のAクラスに

【メイド喫茶 『ご主人様とお呼び！』】という名前で存在していた。

「そつか。ここって坂本の大好きな霧島さんのいるクラスだもんね」  
「それじゃ、入るわよ。お邪魔しまーす」

美波が一番手でドアをくぐる。

「……おかえりなさいませ、お嬢様」

出迎えたのはクールで知的な美人メイド、霧島翔子さんだった。

「わあ、綺麗……」

姫路さんが感嘆の声を洩らす。確かに霧島さんは綺麗だった。

長い黒髪にエプロンドレスの白がよく映えて、

黒のストッキングが彼女の美脚を更に際立たせている。

同性が羨んでも仕方のない麗しさだ。くそつ。やっぱり雄二のヤツが心から憎い！

「それじゃ、僕らも」

「はい。失礼します」

「お姉さん、きれー！」

姫路さんと葉月ちゃんを連れて中に入る。すると、霧島さんは美波の時と同じように

「……おかえりなさいませ、ご主人様にお嬢様」

と、出迎えてくれた。

「……チッ」

雄二も最後に渋々入店してくる。霧島さんはやっぱり同じように、  
「……おかえりなさいませ。今夜は帰らせません、ダーリン」

ちよつとアレンジされていた。

「霧島さん、大胆だいたんです……！」

「ウチも見習わないとね……」

「あのお姉さん、寝ないで一緒に遊ぶのかな？」

三者三様のリアクション。美波は見習ってどうするのか気になるところだ。

「お席にご案内いたします」

霧島さんが歩き出したので、僕らはその後ろ姿についていった。

「ね、お兄ちゃん。凄いお客さんの数だね」

葉月ちゃんがくいくい、と僕の袖そでを引っ張る。

葉月ちゃんの言うとおり、Aクラスの広い教室はお客さんで一杯になっていた。

メイド喫茶だからほとんどのお客さんが男だと思っていたけど、意外と女の人も多いな。

「……では、メニューをどうぞ」

霧島さんが立派な装丁そうていのメニューを渡してくる。凄い。

最優秀クラスは学園祭にまで手を抜かないみたいだ。

「ウチは『ふわふわシフォンケーキ』で」

「あ、私もそれがいいです」

「葉月もー！」

女の子三人は仲良くシフォンケーキ。

「僕は『水』で。付け合せに塩があると嬉しい」

「んじゃ、俺は」

「……ご注文を繰り返します」

遮るような霧島さんの声。

「……『ふわふわシフォンケーキ』を三つ、『水』を一つ、『メイドとの婚姻届いんこんとけ』が一つ。以上でよろしいですか？」

「全然よろしくねえぞっ!？」

動揺した叫び声をあげる雄二。コイツが翻弄ほんろうされている様なんて珍しい。

ここは存分に楽しませてもらうとしよう。

「……では食器をご用意致します」

女の子三人のところにはフォークが、僕の前には塩が、雄二の前には実印と朱肉が用意された。

「しょ、翔子！ コレ本当にうちの実印だぞ！ どうやって手に入れたんだ！？」

「……では、メイドとの新婚生活を想像しながらお待ち下さい」

霧島さんは優雅<sup>ゆうが</sup>にお辞儀<sup>じぎ</sup>をしてキッチンと思<sup>おも</sup>ひき方向へと歩いていった。

「……明久。俺はどうしても召喚大会に優勝しないといけないんだ……！」

「あ、うん。それはもちろん僕もそうだけど」

雄二の目からは並々ならぬ決意が感じられる。やる気を出してくれるのは嬉しいけど、少し怖い。

「んで、葉月ちゃん。キミの言っていた場所<sup>ところ</sup>でここで良かった？」

「うんっ。ここで嫌な感じのお兄さん二人がおっきな声でお話<sup>わ</sup>してたの！」

葉月ちゃんが元気よく頷く。

嫌な感じのお兄さん二人か。それってやっぱり、

「おかえりなさいませ、ご主人様」

「おう。二人だ。中央付近の席は空<sup>あ</sup>いてるか？」

と、話している途中で新規の客の声が聞こえてきた。聞き覚えのある下品な声だ。

「あ、あの人達だよ。さっき大きな声で『中華喫茶は汚い』って言うってたの」

声の主は、さっき僕らのクラスで妨害工作をしてきた常夏コンビだった。

さっきもこの辺で聞いたってことは、もしかして通<sup>かよ</sup>っているのかな？

「それにしても、この喫茶店は綺麗<sup>きれい</sup>でいいな！」

「そうだな。さっきいった二 - Fの中華喫茶は酷<sup>こ</sup>かったからな

！』

『テーブルが腐<sup>くさ</sup>った箱だったし、虫も湧<sup>わ</sup>いていたもんなん！』

人の多い喫茶店の中央で、わざわざ大声で叫びあう。

こんなことをされたら悪評は広まる一方だ！

「待て、明久」

連中を殴り倒しに行こうとしたところを雄二に止められた。

「雄二、どうして止めるのさ！ あの連中を早く止めないと！」

「落ち着け。こんなところで殴り倒せば、悪評は更に広まるだけだ」

雄二の目が鋭く連中を睨<sup>にら</sup>みつける。

確かにこんな人に人の多い場所で殴り飛ばしたら、

Fクラスは悪童の溜<sup>た</sup>まり場<sup>ば</sup>なんて印象を与えかねない。

そうなれば喫茶店の経営も厳しいし、

万が一姫路さんのお父さんの耳に入ったら転校が確定してしまう。

「けど、だからってこのまま指をくわえて見ているなんて」

こうしている間にも噂は人の口に乗って広まっていく。

わかっていながら何もできないなんて、

あまりに歯痒<sup>はがゆ</sup>い！

「いや、やるなら頭を使えということだ　　おーい、翔子おー！」

「……なに？」

呼ばれた瞬間に霧島さん登場。常に雄二の近くにいたんじゃない

か、ってくらいに早かった。

「あの連中がここに来たのは初めてか？」

雄二が顎<sup>あご</sup>で例の二人組を示す。すると、霧島さんは小さく首を振

った。

「……さっき出て行ってまた入ってきた。話の内容もさっきと変わ

らない。

ずっと同じようなことを言っている」

端整<sup>たんせい</sup>な顔を少し歪<sup>ゆが</sup>めていた。

霧島さんにとっても愉快的客<sup>ゆかい</sup>ではないらしい。

「そうか……よし。とりあえず、メイド服を貸してくれ」

『いや、そんな事をする必要はないですよ』

「おわあ！？」

「うおお！？」

僕の隣にはいつの間にかアニメキャラ！？って思うほどの美青年がいた。

『僕に任せてください』

と言うと、常夏コンビの方へ歩いてった。

『大声で話をしないでください。他の人に迷惑です』

と言うと、青年は常夏コンビの耳元に口を近づける。

何かを言っているようで、小さく何かが聞こえる。

すると、常夏コンビの二人の顔がどんどん真っ青になっていき、いきなり青年に土下座をした。

「「すいませんでした！！」」

『分かればいいです』

そう言うとき常夏コンビはものすごい速さで会計を済ませ帰って行った。

「何を言ったの？」

『みんなに言いふらすと学園内に味方が誰一人居なくなるような噂を立てようとしてました』

案外鬼畜だ。

「雄二、そろそろ三回戦が始まるよ」

「何？ もうそんな時間か？」

慌てて会場に向かった三回戦。到着すると、待っていたのは……

「やったじゃねーか、明久」

「そうだね。姫路さんと美波の仇打ちだ」

「全力で行くぞ!!」

「そおか、だつたら」

口が裂けたような笑みを浮かべ、叫ぶ。

「楽しませてくれよなアアアアアアアア！……！！！」

[illegible]

アドバイスを願います。

## 最強と二つ目のバグ

- - - - 数十分前 - - - -

「はア！？んなモンなのか？Aクラスつてのは！」

アクセラレータ 一方通行は驚いていた。なぜかというと。

「よく考えるにやー！。一方通行は学園都市最高の頭脳。言いかえれば世界一の演算力にやー。その点数を超えろっていう方が無理難題だと思うにやー」

アクセラレータ 一方通行がうつむく。

「返せ……………」

「どうしたんだにやー？」

「オレがそれなりに頑張った時間を返せつってんだよオオオオオオ！！！！」

アクセラレータ 「一方通行！落ち着け！首のチョーカーに手をかけるんじゃないにやー！！！！」

対戦相手は気の毒そうに見ている。

「土御門オオ！責任とってあの二人を始末しろ」

「りよ、了解でありますにやー！。アクセラレータ 一方通行隊長」

「………… 試獣召喚！…………」

この場にいる三人の生徒の召喚獣が出現する。

アクセラレータ 一方通行は一人、あまり乗り気じゃなさそうに「試獣召喚……………」と  
呟く。

『Aクラス	緋山紅輔 <small>ひやまこうすけ</small>	&	Aクラス	水川蒼 <small>みずかわそう</small>
英語W	246点	&	231点	

』



流石はAクラスコンビ。点数も立派な方だ。  
でも、勝てない。

『Fクラス	アクセラレータ	&	Fクラス	土御門元春
英語W	727点	&	232点	』

「さーて、暴れるぜい」

鋭角に突っ込みながら攻撃を加える。しかし避けられる。  
そのまま円を描くように動く。

途中で突っ込みながら常に動いている状態、相手は避けるだけで精  
いっぱいといった体だ。

周りから見ても明らかに土御門の方が速く動いている。

「ちくしょう！相手の方が点数が下なのに何であんなに速ええんだ  
よ！」

「気になるかにやー？」

と土御門が聞いてくる。

「んじゃ、ネタばらしだにやー！」

「操作の差だにやー」

「操作の差？」

土御門は攻撃を続けながら言う。

「そうだにやー。俺は自分の身体からだと同じように召喚獣を動かせるに  
やー」

「俺は運動神経はいい方だから…な！！」  
言葉と同時に攻撃を繰り返す。

しかしそれで攻撃は終了。二人から離れた。

「下準備は完了　　さあこれから。魔術師マジシャンによる魔術マジックの詠唱スベルを開始スタートするぜい!!」

そう言った瞬間に周りの空気が変わった。

「今、魔法陣かいじょうの中に居る二人には魔術手伝ってをくらってもらっぜい」

そう言うと、魔法陣から光の縄が伸びてきて二人の召喚獣を縛り上げる。

「絶対にほけないようにキツめにしばっておくぜい」

言うと同時、地面が隆起し、鉄の鎖と拘束具が出てきて二人の召喚獣を地面に押さえつける。

「これから二人には縛られた状態から死脱出してんでもらう」  
土御門の召喚獣は吐血し、わき腹から血がにじみ出ている。

「5秒以内に脱出できなかった場合：炎きついお仕置きだが襲いかかって来る!!」  
そして、

「消逃げるえろ」

「炎は消えぬ、全てを灰に還すまで」。

「何も救わぬ業火を拵げ、ただ燃やし尽くすだけ。」

「肥えた大地を焦土へと、豊かな海を荒れ地へと。」

「そこにはただ響くだけ、炎の魔神の咆哮が!!」

「GAME OVERだにゃー」

ニイ、と笑い、呟く

イフリート・ディ・ファイアンマ  
「焰精業火」

魔法陣から炎が立ち昇る。何かが爆発したような勢いで炎が昇って来る。

少しして、炎は消えた。勝負はもちろん…

『Fクラス    アクセラレータ    &    Fクラス    土御門元春  
英語W    727点    &    100点    』

「アクセラレータ君と土御門君の勝利です!」

「土御門、大丈夫か? さっき召喚獣が吐血してるように見えたんだが」

「問題無いぜよ。まあ、これはもう使いたくないにゃー」

サブライス・オブ・マジック

土御門のバグ、それは、『肉を切らせて骨を断つ』という能力。点数を払い、その2倍のダメージを相手に与える。そのかわり、陣を描いたり、詠唱をしたりなど、面倒なことはいっぱいだ。

2人目のバグ。



## 白銀の鬼神、金色の悪鬼

「楽しませてくれよなアアアアアアア！！！！！！！！」

そう言った一方通行アクセラレータの声は、会場中に響き渡った。

「そ、それではああ！？」

完全にビビってしまった先生が、マイクを捨てて大きく後ずさった。  
一方通行以外の3人は苦笑しながら言った。

「……試獣召喚！」「……」  
サモン

この場にいる四人の生徒の召喚獣が出現する。

服装は見るからに不良同士。

【不良コンビVS街のチンピラコンビ】にしか見えない戦いだ。

「明久、土御門の警戒は要らない。問題は一方通行アクセラレータだけだ」

「それってかなり失礼な発言だと思うにやー」

「そうだね雄二、土御門君は僕と同じくらいの点数だからね」

「吉井と一緒にしないでほしいにやー！？」

「し、失礼な！？僕は少なくとも土御門君よりは頭が良いと思うよ  
！」

「「はあ（ハア）、バカだ……」」

「「そんなことはない（にやー）……」」

『Fクラス 坂本雄二 & Fクラス 吉井明久  
化学 236点 & 92点  
』

『Fクラス アクセラレータ & Fクラス 土御門元春  
化学 912点 & 178点  
』

「「んな！？」」

「なんだよ！土御門君はバカじゃないのかよ！」

「まあ、バカな方に部類されるぜよ。だが、これは得意教科。これと保健体育、英語W以外は吉井と同じくらいぜよ」

『アクセラレータ  
「一方通行、ために死角はねえのかよ」』

半分驚き、半分呆れといった表情で一方通行を見る。

「あるに決まってるだろ。オレだって古典や現代国語は低い方だしな」

「じゃあ400点以下の教科はあんのか？」

「ねエよ」

「はあ、死角なんて無いも同然じゃねえか」

「まア、とにかくやろうぜ」

「いや、棄権させてもらう」

「「ええっ！？」」

「あア？」

どういうことだ雄二！姫路さんの転校はどうでもいいというのか！それなら僕がお前のその腐った性根を……ってあれ？確か一方通行君はFクラスだし……

なるほど！姫路さんのお父さんに『Fクラスにはこんなに頭のいい人がいる』ということを見せれば、転校の話を無しにしてくれるかも！さすが雄二！神童と呼ばれていただけの事はあるね！

でも、学園長ババアの話はどうなるんだ？

「（俺の読みだと一方通行と御坂やライナは繋がっている。もしそうなら…）」

「ンなこたアさせねエよ」

「（そら！食いついた！だとするとこいつらは俺らを勝たせようとする。つてことでもう一声！）」

雄二は嫌な笑みを浮かべながら聞く。

「それは俺たちが勝たなきゃいけない事情があるからか？」

「どういうこと雄二？」

「あア」

アクセラレータ

一方通行はまるでこう聞かれるのを予見していたかのように言う

「随分と冷静だな。秘密の事なんじゃないのか？」

「まアそうだが、テメエの頭ならここまでではたどり着けると踏んでいたからな。想定内だ」

「（裏があるのは予定していたが、相当深そうだな）」

「たぶんテメエならオレ達とライナが繋がってることと読ンでんだろ」

「だがなア」

と言葉を切る。そして

「今はンなこと忘れる。オレは例え負けなきゃいけないとしてもテメエらが勝てる範囲で全力を出す。だからテメエらはオレらを倒すことに集中しろオ」

言い終わった後に雄二は口角を吊り上げる。

アクセラレータ

「なるほど、それじゃあいくぜ！一方通行！！」

「なんだか知らないけど土御門君のあいては僕だ！」

二人は同時に言う。

「「かかってこい！！」」

明久の召喚獣は木刀を縦に振りおろす。

「てい！」

土御門の召喚獣は円を描くように後ろに回り込み、ハイキックをする。

明久の召喚獣は勢いを殺さずに右に避ける。

「おわつと」

土御門の召喚獣が脚を振り切る直前に逆方向に蹴り払った。

「ふん！」

「明久の召喚獣が吹き飛ばされ、壁にぶつかり、痛みがフィードバックする。」

「オレの動きについてこれるかにやー？」

なんて言いながら不規則なフットワークをしている。

「このっ！」

明久の召喚獣はその場から土御門の召喚獣の間合いへと飛び込んだ。  
った。

「隙だらけぜよ」

言葉と同時に、明久の召喚獣の顔面に向かって拳が放たれた。

しかしそれを巧みな操作で避け、木刀をあばらへとたたき込む。

「まだまだあ！」

よろけた土御門の召喚獣の顔面へと木刀を振る。

しかし土御門の召喚獣は一步前へと出て、複雑な動きで反転し、バックステップをした。

明久の召喚獣が着地した瞬間、明久の召喚獣の足元の紋様が輝く。

「じゃあな」

そう言ってから北斗七星の星座の形になるように詠唱しながら前進する。

「北<sup>D C N F O</sup>の夜<sup>B M</sup>空<sup>L T E I E</sup>に輝<sup>S D X M S</sup>くは、我<sup>I S D T M</sup>を照<sup>S A V R O</sup>らす七<sup>P R</sup>つの星。その名は北<sup>B M</sup>斗、その意<sup>L T E I E</sup>は洗<sup>I S D T M</sup>礼。その輝<sup>S D X M S</sup>きは裁<sup>I S D T M</sup>きの光、北<sup>I S D T M</sup>斗の裁<sup>S A V R O</sup>きは罪<sup>P R</sup>を語る！」

明久はあと一步で魔法陣を出られる。だが…。



スウィンス・ディ・クローチエ  
「北斗の罪十字」

魔法陣から巨大な十字架が現れる。  
その十字架は輝きながら光の粒子となり、散った。  
土御門の眼に明久の召喚獣は映らなかった。

『Fクラス 坂本雄二 & Fクラス 吉井明久  
化学 236点 & 26点  
』

『Fクラス アクセラレータ & Fクラス 土御門元春  
化学 912点 & 0点  
』

なぜなら距離が近すぎたから。

「吉井、おまえどうやってあそこから…」

「あの光の十字架が出てきたとき、直感で一步で跳べるって思ったんだ。そしたら跳べたんだ」

「（なるほど…… 馬鹿<sup>うまし</sup>の友 の能力の片鱗か。絶対<sup>ゴット・オブ・バトル</sup>脅力直感。恐れ入るぜい）」

「これで2対1だね。それじゃあ雄二」

「ああ」

「全力で行くぞ！！！！」

アクセラレータ  
一方通行は、それに応えた。

「オレもなアアアアアア！！！！」

3人は同時に走り出す。言いたいことは1つだけだった。

L

[illegible]

—

## 最強との決着

「ハッハアー！！最っ高オーだねエ！！」

「っ……く！！」

「どうしたどうしたア！もう終わりかア？」

「まだまだあ！！」

「いいねエ、もっと楽しませてくれよなア！オイ！！！！」

とは言ったものの、一方通行アクセラレータを開する策が全く見つからない雄二と明久だ。

一応ハンデキャップマッチなのだが一方的に攻め立てられてしまっている。

そのハンデとは……

――数分前――

「だからオレはハンデを付けて勝負しようと思うんだが……どうだ？」

と一方通行アクセラレータは言う。それに雄二は、

「どんなハンデか、にもよるな」

と言った。それに一方通行アクセラレータは笑みを広げて言った。

「それならオレに考えがあんだ」

「一つ目。オレは腕輪を使わねエ。二つ目。先制攻撃はダメエからだア。三つ目。これはこの勝負とは関係ねエが、4回戦はダメエらの相手を棄権扱いにしてもらう。三つ目のハンデは絶対だア」

「俺達にとっては最高って言って良いくらいの条件じゃねえか。いいのか？」

「あア」

「分かった。良いだろう」

「じゃあ早速ハンデの条件を整えるぜエ」

そう言っていると腕輪が光り始めた。

「おい、腕輪は使わねえんじゃ……」

「そのための準備だ。反射を解除、AIM拡散力場による黒い<sup>ヘル・ウ</sup>翼の無効化を承認。ベクトル操作の解除、演算系統の短略化 成

功。能力名<sup>スキルコード</sup>：『一方通行<sup>アクセラレータ</sup>』の最終シャットダウンのセッティングを

開始する チェック項目の全てを終了または完了している事を

確認。能力使用者<sup>スキルマスター</sup>の権限により、『SKILL-SYSTEM A

ccelerator』のシャットダウンを許可、承認し、これを  
実行する」

シューウ〜という音が聞こえ、腕輪の輝きが収まる。<sup>アクセラレータ</sup>一方通行の点数はこうなっていた。

『Fクラス アクセラレータ & Fクラス 土御門元春

399点 & 0点 』

『Fクラス 坂本雄二 & Fクラス 吉井明久

科学 236点 & 25点 』

となっていた。

「なんで点数が!？」

と驚きの表情を浮かべる明久。それとは対照的に『なるほど』という表情をしている雄二。

「…なるほどな。腕輪のシステムの完全シャットダウン、腕輪を使えなくしたわけだ。なぜそんな遠回りな方法で点数を削ったんだ？」

「言っただろ。『オレは例え負けなきゃいけないとしても teme 俺らが勝てる範囲で全力を出す。だから teme 俺らはオレらを倒すことに集中しろ』ってな」

「そういうことか」

ニィ、と雄二は口角を吊り上げ、

「んじゃ、始めるとするか。結果の決まった勝負を」

――――今――――

「（チツ、このままじゃ俺らが負けちまう）。明久！」  
「分かった！」

二人は目を合わせる。

「相互攻撃だ（ね）！！」  
コラボアタック

「（コラボアタック？まあ、作戦名で大体予想はつくけどなア）」  
一撃目、明久が木刀で首元を狙う。余裕でかわされるが、かわした場所に雄二のパンチが唸る。

「チツ」

避けられない攻撃では無いため避ける。が三発目は回避できないためガードで防ごうとする。

「（今だ！！）」

雄二がさっきの攻撃とは別次元の速さで攻撃を繰り出す。明久の点数のほうが低いため遅い。

つまり二つの攻撃が自分に同時に迫ってきているわけだ。普通に考えれば雄二の攻撃を防いだほうがいいが、一方通行は迷っていた。  
アクセラレータ

「（どオする！どオすりゃいいんだよ！！吉井はオレの首元を狙ってる…坂本の攻撃は単純に死ぬかもしれねエ！）」  
アクセラレータ

しかし、この状況下で一方通行の思考は冴えわたっていった。そう、学園都市第一位の頭脳は…さまざまな演算を駆使して、一つの結論にたどりついた。すると、自然と体の緊張はほぐれていった。その結論は……。

「（学園都市第一位がビビってどオする。そオだ。オレに後退は必要ねエ。ここは敢えて前に出てこいつらをぶっ飛ばす）」

明久は何かを感じ取ったよう風に静かに雄二に告げる

「雄二、引いて」

その言葉には少しだけ威圧にも似た響きがあった気がした。

「お、おう」

それを雄二も感じたのか、意外にも素直に応じる。

すると、今まで雄二が立っていた場所に一方通行の拳が振るわれる。アクセラレータ

明久は振るわれた一方通行の拳をつかみ、ひねり上げる。アクセラレータ一方通行は動きを止めた。

「今だ！！」

明久の声が響き、雄二が言うか否かのタイミングでフルスイングの拳を顔面に叩きつける。

バキィ！、という派手な音を立て一方通行は吹っ飛んだ。アクセラレータ

「やったか？」

雄二の声に反応するようにディスプレイに点数が表示される。

『Fクラス アクセラレータ & Fクラス 土御門元春

0点 & 0点

』

『坂本・吉井ペアの勝利です！』

「いいいよっしやああー！！」

「チッ、ハンデなんて付けなくても負けてたかもしれねエなア」

何て言っている一方通行だが、ハンデが無ければ確実に勝っていたのは分かっていた。

「それでは3回戦はかろうじて勝ってきた。ということじゃな？」

「そういうこと、4回戦までまだまだ時間があるけどね」

「ならば、済まぬがこっちの建て直しに協力してくれんか？」

秀吉が申し訳なさそうに表情を曇らせる。別に秀吉が悪いわけじゃないのに。

「そうだな。一度失った客を取り戻す為にも、何かインパクトのあることをやる必要があるけど」

教室の中は相変わらず空席だらけ。悪評の元は断ったはずだけど、流れた噂はどうしようもない。

雄二の言うとおり、これから一つ大きなことをやらないとお客さんは来てくれないだろう。

「ふむ。それで何をするか、じゃが……」

秀吉が教室内を見渡している。僕も教室内を見渡したけど、特にできそうなことは思いつかない。

「雄二、何かアイデアはある？」

「任せておけ。中華とコレでは安直過ぎる発想だが、効果は絶大なのはだ」

そう言つて雄二が取り出したのは、刺繍も見事な水色と白のチャイナドレス。

「ほう。若干裾が短いような気もするが、これならば確かにインパクトはあるじやろうな。コレを宣伝用に」

確かに姫路さんや秀吉が着たらインパクトは絶大だろう。王道だ

けど、悪くない作戦だと思う。

「ああ。コレを　明久が着る」

それはインパクトがありすぎる。

「ちよっ……！　お願い、許して！　メイド服の次にチャイナまで着たら、きっと僕はホンモノだって皆に認識されちゃう！」

楽しい学園生活の為に、これ以上の悪い噂は避けたい。たださえ無駄に有名人になりつつあるんだから。

「冗談だ。これは秀吉と姫路と島田に着てもらう」

「あ、なんだ。良かった」

冗談だったのか。ビックリしたあゝ。

「ワシが着るのは冗談ではないのかのう……？」

秀吉がチャイナドレスを持って溜息をつく。

何をバカなことを言っているのやら。たとえ美波が着るのが冗談だとしても、秀吉が着るのは混じりっ気なしの本気だ。

「たっだいまゝ！　って、なんだ。アキってばメイド服脱いじゃったんだ」

「あ……残念です。可愛かったのに……」

「お兄ちゃん。葉月もう一回見たいな」

と、三人娘が帰宅（？）した。人の気も知らずに好き勝手言うてるなあ。あれでどれだけ僕の悪い噂がまた広まったことが……。

「あはは。残念ながら、ただで人のコスプレを見られるほど世の中甘くないよ？」

にこやかに笑いかける。こちらのを見たならそちらのも見せるべきだ。

「そういうことだ。姫路に島田、クラスの売り上げの為に協力してもらっぞ」

エモノを逃がさないように、チャイナを片手に退路を断つ。少なくとも美波は逃げようとするだろうから。

「な、なんだか二人とも、目が怖いですよ……？」

「凄く邪悪な気配を感じるんだけど……」



若干引き気味なエモノ二名。けど、残念ながら逃げ場はない。

「やれ、明久！」

「オーケー！ へっへっへ、おとなしくこのチャイナ服に着替え痛あつ！ マジすんませんした！ 自分チョーシくれてましたっ！」

「弱いな、お前……」

殴られた腹と頬ほおと腿ももが痛む。どうして美波は男の僕より攻撃力が高いんだらう？

「どうしてまた、急にそんなことを言い出すのよ？ 前に須川はチャイナドレスを着たりすることはない、って言ってたと思うけど」  
予想通り、美波が渋い顔をする。

「店の宣伝の為に、明久の趣味だ。明久はチャイナドレスが好きだよな？」

急に雄二に話を振られる。本当は大好きだけど、なんだかそういつた趣味を知られるのも恥ずかしい気がする。

ここはうまくお茶を濁す程度でごまかそう。

「大好 愛してる」

「……お前は本当に嘘をつけないヤツだな」

あれ？ 台詞の選択を間違えたような。

「し、仕方ないわね。店の売り上げの為に、仕方なく着てあげるわ」

「そ、そうですね！ お店の為ですしね！」

姫路さんと美波がそれぞれ服を手取る。

「お兄ちゃん、葉月の分は？」

「え？ 葉月ちゃんも手伝ってくれるの？」

「お手伝い……？ あ、うん！ 手伝うから、あの服葉月にもちようだい！」

なんて良い子なんだ。美波の妹とは思えない。

「けど、ごめんね。気持ちは嬉しいんだけど、葉月ちゃんの分は数が」

「……………！！（チクチクチクチク）」

「ム、ムツツリーニ！ どうしてそんな凄い勢いきおいで裁縫さいほうを！？ つ

ていつかさつきまでいなかったよね!？」

「……………俺の嗅覚きゅうかくを舐めるな」

なんだろう。格好良い台詞のはずなのに、凄く格好悪い気がする。

- - - - - 5分後 - - - - -

「……………できた」

「わ、このお兄さん凄いです!」

神ことの如き速度で葉月ちゃん用のチャイナドレスが出来上がっていた。  
た。

下心からが絡んだムツツリー二に不可能はない。

それは知っていたけど、まさか小学生まで守備範囲だったとは。つくづく底の知らない男だ。

「ふむ。それでは着替えるとするかの」

「ちよ、ちよつと秀吉! ここで着替えるの! ? きちんと女子更衣室で着替えないとダメだよ!」

純情少年の僕と妄想少年のムツツリー二にその刺激は強すぎる。

「……………最近、明久がワシのことを女として見ておるような気がするんじゃが」

「気のせいだ。秀吉は秀吉だろう」

「うん。雄二の言うとおりだよ。秀吉は性別が『秀吉』で良いと思う。男とか女とかじゃないさ」

「……………俺が言ったのはそういうことじゃない」  
あれ? 違った?

「んしょ、んしょ……………」

「……………！！（ポタポタポタ）」

「は、葉月ちゃん！ キミもこんなところで着替えちゃダメだよ！  
ムツツリーニが出血多量で死んじゃうから！」

大量に出血しているはずなのに、鼻を押さえているムツツリーニ  
は心から幸せそうだった。

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

アドバイスお願いします。

## 平和、そして準決勝。

「たっだいまー」

「ただいま戻りました」

お、この声は姫路さんと美波か。助かった！

「丁度良かったよ。二人とも悪いけど、ホールに回ってくれる？」

僕らはチャイナドレスに着替えた秀吉と葉月ちゃんを連れて校舎内を歩き回った。

最初はあまり効果がないように思えたけど、徐々にお客さんが増えていった。

少し時間が経つと、だいぶ席が埋まり始めた。今のところは順調と言えるだろう。

「良かった。段々持ち直してきたのね」

「良かったです」

「女性客も増えてきているんだよ。きっと味についての噂も流れ始めたんだろうね」

僕はハズレを引いたから知らないけど、皆の反応を見る限り飲茶の出来は相当のものようだ。

段々とチャイナ目的以外のお客さんが増えてきている気がする。

「それじゃ二人ともウェイトレスをやってくれる？」

「はいっ」

「オッケー」

チャイナドレスの裾<sup>すそ</sup>を翻<sup>ひるがえ</sup>して二人は注文票やペンを取りに行った。

これでまたお客さんが増えてくれるだろう。

「君。注文をしてもいいかな？」

「あ、はい。どうぞ」

そうやって二人の後ろ姿に見惚<sup>みと</sup>れていると、近くの席のお客さんから声がかかった。

失礼のないように急いで注文票を構える。

「本格ウーロン茶と、胡麻団子を」

「かしこまりました。本格ウーロン茶と胡麻団子ですね？」

メモを取り、注文内容の確認の為にお客さんに顔を向ける。……あれ？

この人、教頭の竹原先生たけはらじゃないか。また来てくれたんだ。

「ありがとうございます。後ほどお持ちしますので、少々お待ち下さい」

「それと聞きたいことがあるんだが、いいかね？」

「はい。なんでしょうか」

決まり文句を告げて厨房に向かおうとする足を止めて振り向く。

「このクラスに吉井明久という生徒がいると聞いたのだが、どの子かな？」

「え？ 吉井明久は僕ですけど……」

みやへんく脈絡もなくいきなり尋ねられて少し驚いてしまう。

教頭先生が僕に何の用だろう？

「ああ、そうかい。君が 吉井君（笑）か」

「教頭先生。人の名前に（笑）はおかしいかと思えます」

「ああ。それはすまない。だが、私はどうしても教え子である君のことを吉井君（馬）とは呼べなくてね」

「あの、僕は職員室でなんて呼ばれているんですか……？」

（馬）って、どう考えても一つの単語しか思いつかない。

「アキ、厨房の土屋から伝言。茶葉がなくなっただから持ってきて欲しい、だって」

そんなやりとりをしていると、いつの間にか用意を終えた美波が戻ってきていた。

「ん、わかったよ。先生、ちょっと行ってきたもいいですか？」

「構わんよ。特に用があつたわけではないのだね」

「？ そうだったんですか？」

それなら何で僕のことを尋ねたんだろう？

教頭先生とは特になにもつながりがないはずだけどなあ。

「アキ、土屋が急いで欲しいって言ってたわよ？」

「はい」

よくわからないけど、とりあえず用事を済ませるのが先だ。

ストックの置いてある空き教室へと向かおう。

旧校舎の廊下を早足で歩いて目的の場所へ。

えつと、いくつぐらい持つていけばいいかな？ きちんと数を聞いておけばよかったな。

「おい」

「うん？」

空き教室の中で考えていると後ろから声がかかった。

声の主は同年代くらいの男三人組。困ったことに勝手に空き教室に入ってきている。

「ああ、ここは部外者立ち入り禁止だから出て行ってもらえます？」

うちの学校では見たことのない顔だから、きつと他校の生徒だろう。道に迷ったのかな？

「そうはいかねえ。吉井明久に用があるんでな」

そう言つて、向こうの一人が後ろ手で扉を閉めた。

「へ？ 僕に何か？」

「お前に恨みはねえけど、ちょっとおとなしくしてくれや！」

言つやいなや、拳を固めて殴りかかってきた。ええっ？ なんで？

「ちよつと待った！ 人違いじゃないの！？」

屈んで拳をかわし、立ち位置を入れ替える。

なんだか殴られることが多くて避けるのが上手くなってきた気がするなあ……。

「逃げんなコラ！ おとなしくしてろ！」

「いや、そんなこと言われても」

扉側に來たから逃げるのは簡単だけど、それだと喫茶店にこの連中が来てしまう。

さてさて、どうしたものかな。

その時、ガラツと音をたてて扉が開いた。

「オイ吉井。土屋が茶葉の他に餡子あんこも急いで持ってきてくれって言うてんだが」

「あ、一方通行君。アクセラレータ丁度よかった」

「タイミング良く一方通行君が登場。これはラッキーだ。」

「あア？ なんなんですかア？ こいつらは？」

三人を見て眉をひそめる一方通行君。アクセラレータ

「よくわからないけど、一方通行君と喧嘩がしたいみたいなんだ。だから、あとは宜しくね」

「なんだそりや？」

戸惑う一方通行君を教室の中に引き入れ、代わりに僕が廊下に出る。アクセラレータ

「オイ吉井。これは あア、なるほどオ。オマエら余程死にてエらしいなア」

「コイツどうする？」

一方通行？ どつかで聞いた事がある名前だなアクセラレータ

「気のせいだろ。とりあえずやつちまおうぜ」

「なア、『無傷無敗』って知ってるかオイルバーフエクト」

「なっ！？ おまえが！」

「気づいた時にはも才遅いつてなア！！」

そんな会話を背に、扉を閉めて5秒待つ。すると 「お、覚え  
てろっ！」おほ

「てめえの面、忘れねえからな！」

「夜道に気をつけるよ！」

見事な負け犬の完成です。さすがは一方通行君、強いもんだ。アクセラレータ

一方通行君。あの連中、なんだったかわかる？」

「売れ行きがよくなったFクラスの妨害でもしに来たんだろ」

「あはは。そんな理由で絡んでくるバカはいないよ」

「どオだろオな。とりあえず急いで戻るぞ。土屋が待ってる」

「はいよ」

再び教室に入り、僕と一方通行君は茶葉と餡子を抱えて喫茶店へアクセラレータ

と戻っていった。

「久々に喧嘩アできたのは良かったが、勝手にオレのこと閉じ込めやがったから後で愉快的死体に変えてやンよ」

「一方通行君！？発言が怖いよ！？え？ほ、本気？う、腕がねじり切れ…ああああ！？」

そんなこんなで二時間が過ぎ

「明久。そろそろ四回戦だ」

「え？ もうそんな時間なの？」

時計を見て時間を確認する。午後二時過ぎ。

喫茶店に夢中になっているうちに随分と時間が過ぎていたみたいだ。

「あれ？ アキたちそろそろなの？」

「頑張ってきてくださいね明久君！」

「アキ、勝ってきて」

女子二人からの声援。ああ幸せだ。でも相手は棄権になってるんだけどね。

「それでは、四回戦を始めたいと思います。出場者は前へどうぞ」  
パチパチと声援が上がる。くどいようだけど相手は棄権だからね。

「と、行きたいのですが。相手の選手は二人とも不慮の事故で全身を複雑骨折……」

「やりすぎじゃない！？一方通行君！多分それは『やる』じゃなくて『殺る』だと思ってるのは僕だけじゃないはずだ。」

「で、四回戦は不戦勝じゃったと？」



「うん。相手が不慮の事故で棄権したんだ」

正確に言えば一方通行君が殺ったんだけどね  
アクセラレータ

「あの、絶対に優勝してくださいね……？」

姫路さんか上目遣いつかに覗き込んでくる。こ、これは凄い威力だ！

…！

「もちろんだよ。絶対に優勝する。全部うまくやってみせるさ！」

こんなに可愛い姫路さんを転校なんてさせるものか！

「やれやれ。それなら明日の朝は気合を入れて起きてこいよ　　っ

と。ほう。なかなか盛況せいきやうじゃないか」

「そうだね。結構いい感じだね」

我らがFクラスには結構な数のお客さんが入っていた。

「あ！　バカなお兄ちゃん！　お客さんがいっぱい来てくれたんだよ！」

葉月ちゃんが僕らの姿を認めて、店の中からトトトツと駆け寄ってくる。

「そうだね。葉月ちゃん、お手伝いどうもありがとうね」

「んにゃ……」

頭を撫でると気持ち良さそうに目を細めている。本当に猫みたいで可愛いな。

『お、あの子たちだ！』

『近くで見ると一層可愛いな！』

『手伝いの小さな子も教室内にいる子も可愛いし、レベルが高いな！』

お客さんたちの中からそんな声があがる。

やっぱりチャイナドレスは男を惑まどわす効果があるね。

「そんなことよりも、数少ないウェイトレスが固まっていたら客が落胆するぞ。今は喫茶店に専念してくれ」

お客さんたちの視線がこちらに随分と集中している。綺麗どころ四人が固まっているのだから無理もない。

「そうですね。喫茶店のお手伝いをしないといけませんよね」

そこで  
袖がない服だけど、気持ちの問題なのか腕まくりの仕草を見せる  
姫路さん。

「そうね。ちょっと視線が気になるけど、売り上げの為に頑張りますか！」

「はいっ。葉月も頑張りますっ」

「……………ワシは一応男なのじゃが……………」

「秀吉。絶対に性別をバラしちゃダメだからね？」

お客さんの夢の為に、僕らの売り上げの為に、秀吉には完璧な女の子でいてもらわないと困る。

ついでに個人的にもそうだと嬉しいというのは秘密だ。

「やれやれ、仕方ないのう……………。あ、いらっしやいませー！ 中華喫茶ヨーロピアンへようこそー！」

新規入店のお客さんが来た瞬間に秀吉の口調が変わった。

本人の気持ちとは裏腹に演劇魂えんげきたましいが勝手に反応しているみたいだ。あ  
りがたいことだ。

「さて、俺たちも突っ立ってないで手伝うか」

「ん、そうだね」

僕と雄二も喫茶店を手伝う為に用意されたエプロンを身につけた。

「それじゃ、準決勝に行ってくるね」

「はい。頑張ってくださいね」

「アキ、負けたら承知しないからね！」

「わかってるって」

喫茶店の中で動き回ること一時間。いよいよ準決勝の時間となった。決勝戦は二日目の午後に予定されているから、今日の試合はこれでラストとなる。

「しかし意外だな。翔子が負けるなんて」

そうFクラスの完璧美女と怠惰たいだの塊のコンビが優勝候補の霧島さんのコンビに勝つたらしい。

「今回の作戦は対、翔子&木下姉に向けて作った作戦だ。だが絶対に勝てる。安心しろ」

「アキなら不安だけど、坂本がそう言うなら大丈夫ね。きっちり勝つてきなさいよ！」

「お兄ちゃんファイトですっ」

「あいよっ」

クラスの声援を背に受け、僕と雄二は会場に向かって歩き出した。「で、雄二。作戦ってどんなの？」

道すがら隣の雄二に尋ねる。

実は僕も雄二の作戦を知らないのです、どういった行動を取ったらいいのかわからなかったりする。

「今回は俺たちだけじゃなくて、秀吉とムッツリー二にも協力してもらおう。お前はそれに合わせるだけでいい」

「秀吉とムッツリー二？」

そう言えば、二人ともさっき教室にいなかったな。

「ああ。あの二人には弱点はないか、付け入る隙はある」

付け入る隙？ 確かに僕も霧島さん相手なら手段がないわけでもない。

でも、相手はフェリスさんとライナくんだ。霧島さんへの作戦が何の役に立つのだろうか？

「狙いはフェリス、フェリス・エリスだ。ヤツを利用して一気に形勢を傾ける」

フェリスさん？ 彼女は完璧だから付け入る隙なんて無いと思うけどなあ。

「とにかく気合を入れる。この戦いに負ければ、お前は大好きな姫路を失う。命が懸かっていると思え！」  
「いや、おう、もうすぐ勝負の場となるステージだ。否が応にもテンションが上がる。」

「その『大好きな』ってのはやめて欲しいけど、了解！ 絶対に負けるものか！」

会場を前に、二人で気合を入れる。

元よりこの勝負、負けることなんて考えていない。どんな手段を用いても勝ってみせる！

「おっしや！ 行くぞ！」

「おうっ！」

「お待たせいたしました！ これより準決勝を開始したいと思います！」

僕らが到着すると、審判を務める先生のアナウンスが流れた。どうやら時間ぎりぎりだったみたいだ。

「出場選手の入場です！」

まるで格闘技の入場みたいだ、と思いながらお客さんたちの前に立つ。僕らの向かいからは対戦相手のフェリスさんとライナくんがやってきた。

「はあ、メンドい……」

全てを達観しているような眼で彼は言った。

[illegible]

アドバイスを願います。

## 誘拐、そして土御門

「なあ、フェリス、ここは棄権しないか」

「しない。今度そんなことを言ったら前の学校の時のようにお前を」

「ホントにそれはやめてください。変態色情狂とか<sup>へんたいしきじょうきやう</sup>」

そんなことを言い合いながらステージに上がって来たフェリスさんとライナ君。

彼らには緊張感というものは無いのだろうか。

『お待たせいたしました！ これより準決勝を開始したいと思います！』

僕らが到着すると、審判を務める先生のアナウンスが流れた。

どうやら時間ぎりぎりだったみたいだ。

『出場選手の入場です！』

まるで格闘技の入場みたいだ、と思いながらお客さんたちの前に立つ。

「「「「サモン  
試獣召喚っ！」」」」

『Aクラス フェリス・エリス & Fクラス ライナ・リュート  
保健体育 0点 & 698点』

VS

『Fクラス 吉井明久 & Fクラス 坂本雄二  
保健体育 102点 & 162点』

あれ？なんかフェリスさんが最初から死んでる気がするんですけど。

「ああ、フェリスは問題見た瞬間に顔を真っ赤にして逃げたから0点なんだ」

そんな恥ずかしくなるような問題ってあったわけ？

と、思ったら雄二が秀吉とムツツリー二に合図のようなものを送っている。なんだろう？

あつ！僕も知ってる暗号だ！なにになに？

「（ムツツリー二。準備は問題ないか？）」

「（……………これくらいの情報操作は出来て当然）」

情報操作？そんなことしてたのか。

「（秀吉、俺が合図をしたら演技を始める。声は即興で作っていい）」

「

「（合図はどうするのじゃ？）」

「（俺が頭をかいたらやってくれ）」

「（わかったのじゃ）」

なるほど。声真似が必要なのか。

「（それって霧島さんと木下さんにも効果がある作戦なの？）」

「（いや、これは応用したものだ。あの二人にとっては効果抜群だ）」

「

その時、雄二が頭をかいた。

遠くから、正確に言うライナ君側から声が聞こえてくる結構な大声だ。

『あそこのだんご屋おいしかったよねー』

『良かったー。1日限定30食の三色だんごあと3つって言ってたよ』

『ウチらラッキーだったんだね』

『そうだ！店の名前なんて言うんだっけ…』

『ウィニットだんご店だよ』

と言ってるうちにフェリスさんの顔が真っ青になっていく。

そして、ウィニットだんご店の言葉を聞いた瞬間に、ライナ君の方を向いた。

「ライナ……」

「な、なんでございませうか？フエ、フェリス様……」

「行くぞ……」

「はい？」

「ウィニツトだんご店に行くぞ！！ライナ！！」

「ちよつ！おまつ！召喚大会はどうするんだよ」

「ライナ、口答えするならお前が変態色情狂だという事を……」

それを言った瞬間、秀吉がニヤリと笑う。あつ、今は秀吉（悪）なんだね。

『ライナ君が変態だつて噂ほんとなのかな？』

『マジかよ……あいつそんな……』

というような声が入ってくる。それにライナ君は。

「だーもう！分かったよ！先生！棄権扱いでお願いします！！」  
え？つてことは。もしかして……。

『……坂本・吉井ペアの勝利です！』

勝ち名乗りを受け、僕は手を挙げて観客に向き直った。

けど、観客は冷めた目で僕を見ていた。

そうだよね。召喚獣勝負を見に来たのに、殆ど召喚獣が出てきてないもんね。

「それじゃ、僕らはこれで！」

ペコつと一札し、罵声ばせいが聞こえてくる前に教室へと引き返すことにした。

「雄二、ムツツリー二は何をしたの？」

「情報操作だ。もっと詳細を言つとライナの知名度を格段に上げた。しかも良い方だな」

「それが何になるの？」

正直言つて何が言いたいのかわからない。

「ギャップつてのは良い方でも悪い方でも多大な影響を及ぼす。あんなに良い奴が、あんなにすごい奴が変態色情狂だなんて。つてなただ、心酔しちゃうてるライナファンは好感度が下がるよりもむしろ

る上がる。だから、好感度の総合値は変わらないんだ。つまり、ライナの好感度を変えずに勝利出来ちゃう作戦だ」

なるほど、友人の好感度を変えずに勝つ、優しい作戦ね。

下がる人はどん底まで下がると思ってるのは僕だけだろうか。

「ところで姫路や島田は教室にいるのか？」

「え？ まだ確認してないけど、いるんじゃないの？」

この時間は姫路さんや美波や葉月ちゃんは喫茶店でウェイトレスをやっているはずだ。さっき戻った秀吉やムツツリー二も仕事を再開しているだろう。

「多分、そろそろ仕掛けてくるはずだと思うんだが……」

雄二が不穏な言葉を口にする。そろそろ仕掛けてくるってなんだろう？ また例の妨害かな？

「……………雄二」

教室の前まで戻ってくると、ドアの前に立っていたムツツリー二が駆け寄ってきた。

「ムツツリー二か。何かあったのか？」

「……………ウェイトレスが連れて行かれた」

「ええっ！？ 姫路さんたちが！？」

どうしてこうも次から次へと！ 本当に何が起きているっていうんだ！

「やはり俺や明久と直接やり合っても勝ち目がないと考えたか。当然と言えば当然の判断だな」

雄二の呟きが聞こえてくる。直接やり合いつて、喧嘩のことだろうか？

だとしたら、僕はともかく雄二に敵うヤツなんてそうはいない。

この男は勉強をサボり続けた分、身体を鍛えまくっていたからなあ。

「ってそんなことより、姫路さんたちは大丈夫なの！？どこに連れて行かれたの！？相手はどんな連中！？」

「落ちて着け明久。これは予想の範疇だ」

「え？ そうなの？」



「ああ。もう一度俺たちに直接何かを仕掛けてくるか、あるいはまた喫茶店にちょっかいを出してくるか。そのどちらかで妨害仕事を仕掛けてくるとは予想できたからな」

どうやら今回はウェイトレスを連れ出すという喫茶店の妨害の方らしい。確かにそんなことをされては売り上げに影響が出るだろう。「なんだか随分と物騒な予想をしてたんだね」

雄二は姫路さんたちに何かが起こるということまで想定していたみたいだ。

今までの妨害とは違って、今回の場合はしやれでは済まない。

下手をすると警察沙汰になるというのに。

「引つかかることが随所にあつたからな」

そつえば、最近の雄二はたまに何かを考える素振りを見せていた。

その時から何か違和感を抱いていたのだろう。

「……………行き先はわかる」

と、ムツリーニが取り出したのは何かの機械。

「なにこれ？ ラジオみたいに見えるけど」

「……………盗聴の受信機」

「オーケー。敢えて何で持っているのかは聞かないよ」

クラスメイトから犯罪者なんて出したくないし。

「さて、場所がわかるなら簡単だ。かるくお姫様たちを助け出すとしましょうか、王子様？」

「そのニヤついた目つきは気に入らないけど、今回は雄二に感謝しておくよ。姫路さんたちに何かあったら、正直召喚大会どころの騒ぎじゃないからね」

「……………それが向こうの目的だろうがな」

「え？」

「とにかく、まずはあいつらを助け出そう。ムツリーニ、タイミングを見て裏から姫路たちを助けてやってくれ」

「……………わかった」

「雄二、僕らはどうするの？」

「王子様の役目は昔から決まっているだろう？」

茶目っ気たっぷりの目がこちらを向く。

「王子様の役目って？」

「お姫横をさらった悪者を退治することさ」

『さてどうする？ 坂本と 吉井だったか？ そいつら、この人質を盾にして呼び出すか？』

『待て。吉井ってのは知らないが、坂本は下手に手を出すとマズい。今はあまり聞かないが、中学時代は相当鳴<sup>な</sup>らしていたらしいからな』

『坂本って、まさかあの坂本か？』

『ああ。できれば事を構えたくないんだが……』

『気持ちにはわかるがそうもいかないだろ？ 依頼はその二人を動けなくすることなんだから』

『それに今は『反則破り《ルールキラー》』もいる。負ける要素は無いぜ』

『そういうことだにやー』

『でも相手には『無傷無敗』<sup>オールパーフェクト</sup>と『正義の味方』<sup>スーパーヒーロー</sup>がいるぜ？』

『二つ名でビビってんじゃねーよ』

ムツッリーニの持っていた受信機から声が聞こえてきた。待て、  
『にやー』？もしかして土御門君？

（雄二、この連中って）

（ああ。黒幕に依頼されたそこのチンピラだろうな。あと土御門もな）

ムツッリーニに案内されたのは、文月学園<sup>ふみづき</sup>から歩いて五分程度のカラオケボックス。そのパーティールームに姫路さんたちは連れて行かれたらしい。

『お、お姉ちゃん……』

『アンタたち！ いい加減葉月を放しなさいよ！』

聞こえてきたのは美波の怒鳴り声。葉月ちゃんが捕まっているせいでろくな抵抗もできずに連れて来られちゃったのか。

『お姉ちゃん、だつてさ！　かつわいいー！』

『ギャはははは！』

吐き気すら覚える外道の声は七人分つてところだろうか？　上等だ。今すぐ黙らせてやる。

（待て、明久。勝手に行動するな。気持ちはわかるが、まずは人質の救出が先だ。ムツツリーニがうまくやるまで待っている）

（……わかったよ）

雄二の言うとおり、ここはじつと我慢しよう。もうすぐムツツリーニがなんとかしてくれる。僕らの出番はそれからだ。

『……灰皿をお取り替え致します』

『おう。で、このオネーチャンたちどうする？　ヤっちゃっていいの？』

『だつたら俺はコツチの巨乳チャンがいいなー！』

『あつ！　ズリー！　それなら俺二番ね！』

パーティールームの中からは下品な笑い声が響き渡る。

『あ、あのっ！　葉月ちゃんを放して、私たちを帰らせて下さい！』  
『だつてさ。どうする？』

『それはオネーチャンたちの頑張り次第だよな？』

『やつ！　さ、触らないで』

『ちよつと、やめなさいよ！』

『あーもう。うっせえ女だな！』

『きやあつー！』

ドン、という何かを突き飛ばした音と美波の悲鳴。

その後数瞬遅れて聞こえてきたのは、ガシャアアンなんていう、まるで何かがテーブルを巻き込んで倒れたような音だった。

……そして、僕の中で、何かがトんだ。

（おい、明久！）

雄二の制止する声がどこか遠くの出来事のように思える。

「おじゃましまーす！」

とりあえずドアを開け放って目的の部屋に入ることにした。

「よ、吉井君？」

「アキ……」

身を縮めている姫路さんと、尻餅をついている美波。

中では大体想像どおりの光景が展開されていた。

「ハア？ お前誰よ？」

入り口付近に座っていた男が僕に声をかけてくる。そうだね。ま  
ずはこの人からいこうか。

「それでは、失礼して……」

彼の手首を軽く振り、

「死にくされやあつ！」

股間を思い切り蹴り上げた。

「ほごあああつ！」

足に嫌な感触が伝わってくる。相手はその一撃だけで白目を剥い  
て失神していた。

「 temeエラ、よくも美波に手をあげてくれたな！ 全員ブチ殺して  
やる！」

やったのはどいつだ？ 美波の近くにいまするか？ それとも…  
…？ まあいいか。わからないなら全員殴ればいいだけだ！

何だろう。意識が鮮明になっていく。相手の動きがごくスローに  
見える。

「コイツ、吉井って野郎だ！」

「どうしてここが！？」

「とにかく来ているのなら丁度いい！ ぶち殺せ！」

テーブルを蹴散らし、四人の男が群がってくる。

「たった一人で調子くれてんじゃねえよ！」

その時、ドカン！！とドアが開く。

「お客様ア、ちよっとうるせェンで永眠してもらっていいですかア  
？」

そんな言葉と共に目の前のチンピラを吹っ飛ばす一方通行君。アクセラレータ

「よう、一方通行。アクセラレータ 遅いにゃー」

えっ？遅い？いまいち情報が理解できない。

他の部屋からチンピラが出てくる。おおよそ40〜50人だすごい人数だな。

「やれやれ……この阿呆が。少しは頭を使って行動しろってのっ！」

「げぶっ！」

向かってきた相手は壁に叩きつけられていた。

「雄二っ！」

「貸しイチ、だからな？」

ともうひとり入って来る。ってライナ君！？喧嘩なんて出来ないだろうに。

「やばい、あいつまできたのかよ」

喧嘩で有名だったのか！知らないけど。

そこで、本物の店員と思われしき人が言ってくる。

「失礼します」

「……うっ！」「……」

土御門君と一方通行君とライナ君がうめいた。アクセラレータ 知り合いだろうか。

「他のお客様に迷惑ですのでそういう事はやめていただけませんか？」

「なんだあ？てめえオレに喧嘩売ってんの……」

「……やめろ！……そいつに喧嘩を吹っ掛けんじゃねえ！」「……」

そんなに言うなんて大切な人なんだろうか？あっ！あの店員さん囲まれてる！助けないと！

ガシッ！と3人に腕を掴まれる。

「どついう事？あの店員さんを助けないと……」

「いや、吉井。それは違うにゃー！。救うのはむしろチンピラの方ぜよ。それより早く島田達を救出して教室にもどるにゃー」

「えっ？それってどついう……」



## S P Y

「今からとある人物に電話をかけるにやー。オレとその人の会話で何があつたかわかるにやー」

そう言うと、設定をスピーカーにして電話をかけた。

「もしもし？教頭かにやー？」

『ああ、竹原だ』

「すまないにやー。オレがいたにも関わらず…」

『問題無い。他にも策は用意してあるからな』

「次の作戦にも入るにやー」

『いや、君は待機でいい。君は十分働いた。全く、オルサウザンドオーバー全教科完全攻略は何が目的で吉井と坂本を手助けしているのやら』

「見当もつかないにやー。学園長を擁立してるとしか…」

『単に我らの計画を邪魔しているようにも見える』

『まあ、私は召喚獣システムで文月学園に行ってしまったウチの生徒が戻ってきてくれればそれでいいのだがね』

うーん、どういうことだろ？意味がわからないや。

『あの腕輪を暴走させれば、学園長は失脚し、ウチに生徒が…』

土御門君がにやりと笑う。

「ところで教頭」

『どうした？土御門』

「今、オレの周りに吉井と坂本が居るんだが…どうするんだにやー？」

『何！？馬鹿が！何をやっている！しかし断片的な情報では手掛かりすら見つからないはず』

「残念。スピーカーで電話してるから企みから何までダダ漏れだにやー」

『くっ！貴様！裏切ったか！だが残念だったな！バレたところで坂

本と吉井の言葉を信用する奴など数える程しかない！」

「確かに証言だけならそうかもしれないやー。でも、ボイスレコーダーがあれば、話は別だにやー」

『くそっ！どいつもこいつも！』

「まあまあ、そう自棄<sup>やけ</sup>にならずに  
それを最後に電話を切った。

「話は分かったはずだにやー」

「ちよつと待つ！」「詳しい説明はもうそろそろ来る学園長<sup>ババア</sup>に聞いてくれい」

「学園長がわざわざここに来るの？」

「俺が呼び出した。さっき廊下で会った時に、『話を聞かせろ』ってな」

「話ねえ……。ダメだよ雄二。一応相手は目上の人なんだから、用事があるならこっちから行かないと」

「用事もクソも……。この一連の妨害はあのババアに原因があるはずだからな。事情を説明させないと気が済まん」

雄二が当然のように告げた台詞<sup>せりふ</sup>は、僕には驚きの内容だった。

「あ、あのババア！ 僕らに何か隠してたのか！」

「っってお前は土御門の説明を聞いてなかったのか！」

そのせいで姫路さんたちが危険な目に遭うし、喫茶店の経営は苦勞するし、ここは文句を言ってやらないと！

「……やれやれ。わざわざ来てやったのに、随分とご挨拶<sup>あいさつ</sup>だねえ、ガキどもが」

声と同時に教室の扉がガラガラと音を立てて開いた。

「来たかババア」

「出たな諸悪の根源<sup>こんげん</sup>め！」

「おやおや、いつの間にかアタシが黒幕扱いされてないかい？」

まるで私は被害者ですといった様子で肩をすくめる。



「黒幕ではないだろうが、俺たちに話すべきことを話していないのは十分な裏切りだと思っ<sup>が</sup>な」

「ふむ……。やれやれ。賢<sup>さか</sup>しいヤツだとは思っていたけど、まさかアタシの考えに気がつくとは思わなかったよ」

「最初に取り引を持ち掛けられた時からおかしいとは思っていたんだ。あの話だったら、何も俺たちに頼む必要はない。もっと高得点を叩き出すことのできる優勝候補を使えばいいからな」

「あ、そういうばそうだね。優勝者に後から事情を話して譲<sup>ゆず</sup>ってもらうとかの手段も取れたはずだし」

「そうだ。わざわざ俺たちを擁立<sup>ようりつ</sup>するなんて、効率が悪すぎる」

擁立……。えっと、確か『支持すること』だっけ？

「話を引き受けてきた教頭の手前おおっぴらに妨害することができない、とかは考えなかったのかい？」

「それなら教室の補修に関して渋<sup>しぶ</sup>ったりなんかしないはずだ。教育方針なんてものの前にまず生徒の健康状態が重要なはずだからな。教育者側、ましてや学園の長が反対するなんてありえない」

「つまり、僕らを召喚大会に出場させる為にわざと渋<sup>しぶ</sup>ったってこと？」

「そういうことになるな」

こ、このババア……！

「あの時、俺がババアに一つの提案をしたのを覚えているか？」

「提案？ えーっと」

「科目を決めさせるってヤツかい。なるほどね。アレでアタシを試したってワケかい」

「ああ。めばしい参加者全員に同じような提案をしている可能性を考えてな。もしそうだとしたら、俺たちだけが有利になるような話には乗ってこない。だが、ババアは提案を呑<sup>の</sup>んだ」

提案を呑んだってことは、他の人ではなく僕らが優勝しないと学園長は困るってことか。改修を渋<sup>しぶ</sup>ったことといい、得点の高い人たちじゃなくて、敢えて僕らに依頼したことには何か理由がありそう

だ。

「他にも学園祭の喫茶店ごときで営業妨害が出たり、俺たちの対戦相手に情報を流す密告者がいたり色々あったしな。それに何より、俺たちの邪魔をしてくる連中が姫路たちを連れ出したのが決定的だった。ただの嫌がらせならここまでではない」

アレは本当に危なかった。ムツツリー二が盗聴器を仕掛けてくれていなかったらどうなっていたのかわからない。下手をすると警察沙汰だ。

「そうかい。向こうはそこまで手段を選ばなかったか……すまなかったね」

と、突然学園長が僕らに頭を下げてきた。あの厚顔こうがんな学園長が！  
「アンタらの点数だったら集中力を乱す程度で勝手に潰つぶれるだろうと最初は考えていたのだろうけど……決勝まで進まれて焦あせったんだろうね」

もしかすると、意外と責任感の強い人なのかもしれない。年下の僕らにきちんと頭を下げるなんて、簡単なようではなかなかできるところじゃないのだから。

「さて、こちらのタネ明かしはこれで終わりだ。今度はそっちの番だ」

「はあ……。アタシの無能を晒ひすような話だから、できれば伏せておきたかったんだけどね……」

だから誰にも公言しないで欲しい。そんな前置きをして、学園長は僕らに真相を明かし始めた。

「アタシの目的は如月ハイランドのペアチケットなんかじゃないのさ」

「ペアチケットじゃない!? どういうことですか!?!」

「アタシにとっちゃあ企業の企たくらみなんかどうでもいいんだよ。アタシの目的はもう一つの賞品しょうひんの方なのさ」

「もう一つというと、『白金の腕輪』とやらか」

「ああ。あの特殊能力がつくとかなんとかってやつ?」

少し調べてみたけど、白金の腕輪は二つあるらしい。

一つはテストの点数を二分して二体の召喚獣を同時に喚び出すことのできる腕輪。もう一つは先生の代わりに立会人になって召喚用のフィールドを作ることのできる腕輪。こっちは使用者の点数に応じて召喚可能範囲が変わるらしい。召喚の科目はランダムで選択されるのかなんとか。

「そうさ。その腕輪をアンタらに勝ち取って貰いたかったのさ」

「僕らが勝ち取る？ 回収して欲しいわけじゃなくて？」

「あんな……。回収が目的だったら俺たちに依頼する必要はないだろう？ そもそも、回収なんていう真似は極力避けたいだろうし、な」

雄二が学園長を揶揄するように話を振る。

「本当にアンタはよく頭が回るねえ……。そうさ。できれば回収なんて真似はしたくない。新技術は使って見せてナンボのものだからね。デモンストレーションもなしに回収なんてしたら、新技術の存在自体を疑われることになる」

できればということは、最悪の場合はそれも考えていたのだろう。「それで、何でその『白金の腕輪』を手に入れるのが僕らじゃないとダメなんですか？」

「……欠陥があつたからさ」

苦々しく顔をしかめる学園長。技術屋にとって新技術の欠陥は耐え難い恥のはずだ。それを生徒である僕らに明かすのだから無理もない。

「その欠陥は俺たちであれば問題ないのか？」

「そうさ。アンタたちが使うなら暴走が起こらずに済む。不具合は入出力が一定水準を超えた時だけだからね。だから他の生徒には頼めなかったのさ」

「なるほどな。得点の高い優勝候補を使えないわけだ」

今度は雄二が苦笑いをしている。

「えーっと、つまり……？」

「アンタらみたいな『優勝の可能性を持つ低得点者』ってのが一番都合が良かったってわけさ」

「よくわからないけど、とりあえず褒められてるってことでいいのかな？」

「いや、お前らはバカだと言われているんだ」

「なんだとババア！」

「説明されないとわからない時点で否定できないと思うんだが……」  
くっ！ 雄二はわかっているみたいだし、こうなると僕だけがバカみたいじゃないか！

「二つある腕輪のうち片方の召喚フィールド作製用はある程度まで耐えられるんだけどねえ……。もう片方の同時召喚用は、現状のまだまだと平均点程度で暴走する可能性がある。だからそっちは吉井専用にと」

「雄二、これは褒められていると取っていいんだよね？」

「いや、バカにされている。物凄い勢いで」

「なんだとババア！」

「いい加減自分で気づけ！」

くそっ！ 直接お前はバカだ、とか言ってくれないとわかりにくい！ これが年の功による会話術ってヤツか！

「そうか。そうなると、俺たちの邪魔をしてるのは学園長の失脚しきやくを狙ねらっている立場の人間 他校の経営者とその内通者といったところだな」

「雄二、そうやって僕を会話から置き去りにするのはやめて欲しいな？」

「やれやれ、このバカが……。俺たちの邪魔をするってことは、腕輪の暴走を阻止そしされたら困るってことだろ？ そんな学園の醜聞しゅぶんをよしとするヤツなんて、うちに生徒を取られた他校の経営者くらいしかないだろうが」

ああ、そういうことか。雄二も意地が悪いなあ。きちんと順を追って話をしてくれたら良いのに。

「ご名答。身内の恥を晒すみたいだけど、隠しておくわけにもいかないからね。恐らく一連の手引きは教頭の竹原たけはらによるものだね。近隣の私立校に出入りしていたなんて話も聞くし、まず間違いはないさね」

「それじゃ、僕らの邪魔じゃまをしてきた常夏コンビとか、例のチンピラとかは」

「教頭の差し金かねだろうな。協力している理由はわからんが」  
ふむふむ、と額うなずいてみてふと思う。

「あのさ、コレって　かなりマズい話じゃない？」

「そうだな。文月学園の存続が懸かかっている話になるな」

試召戦争と試験召喚システムは、その特異な教育方針と制度で存在自体の是非せいひが問われているものだ。そんな状態で暴走なんていう問題が起きたら、学校そのものの存在意義も問われることになる」

「あ、でも。いざとなったら優勝者に事情を話して回収したら」

僕はズボンのポケットから小さな冊子を取り出す。書き込まれているトーナメント表を追っていくと、対戦相手は、

「「須川君！？」」

「それに、Fクラス御剣神哉ごけんしんざいって…」

僕がその名前を言った瞬間、学園長の顔色が急変した。

「御剣神哉だつて！？あんの馬鹿おろ！全教科完全攻略のくせにこんな大会に出たら勝負が見えてるようなモンじゃないかい…」

どうしたんだろう？

「相手が相手、交渉は無理だね」

「何ですか？やってみないと…」

「無理だね。理由は話せないが無理なモンは無理だよ」

絶対に無理みたいだ。何かを知ってるみたいだけど話さないならいか。

「悪いが、アンタたちにはなんとしてでも優勝してもらっしかないんだよ」

学園長の表情も硬かたい。事態はかなり深刻なところまで来ているみ

たいだ。

「まさかこんなことになっているとはな」

雄二までそんなことを言い出す。

「学園長、質問です」

「なんだい？」

「腕輪の暴走って、総合科目で平均点にいかねければ起こらないんですか？」

「そうさ。一つや二つの科目が高得点でも、その程度なら暴走は起きないよ」

「そうですか。それは良かった」

僕らが暴走を引き起こしたんじゃない。幸い（？）<sup>さいわい</sup>雄二も総合ではまだそこまでの域に達していないし、問題なさそうだ。

「雄二。聞きたいことは聞けたし、今日はもう帰ろう」

「そうだな。家に帰ってやることもあるし 明日も早いしな」

「それじゃ、アタシは学園長室に戻るとするかね」

学園長が静かに椅子から立ち上がった。

「二人とも、明日は頼んだよ」

「はい」

こうして学園祭初日は幕を閉じた。

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

アドバイスお願いします。

雄二？

「はあ、疲れたあ」

帰って間もなく疲労感と眠気のダブルパンチ。

「すぐに勉強しようと思ったけど一回寝てからやる。ほわあ……」  
そのまま睡眠。

その時、明久は奇妙な夢を見た。

- - - - - 夢 - - - - -

そこは城の窓際。

赤いマントを羽織り、上位の騎士のような、関節部分が金に輝く白い甲冑に身を包んだ雄二がいた。

「なあ、俺達って親友だよな」

そんなことを雄二が言ってくる。それに僕はこう返す。

「もちろん。でも親友というより悪友だと思うけどね」

「かっかっか！そりやそうだな」

あれ？雄二ってこんな笑い方してなかったと思うけどなあ。

「なあ、もしおまえに p l k t b j 童 の力があつたら  
どうする？」

は？今何て言ったの？聞き取れなかったんだけど。

「ゴメン雄二、もう一回言って」

「はあ？雄二？誰だそりや」

え？雄二じゃないの？

「ん？ああ お前が現代の p l j k w 鹿 x p l d s p か」  
ええと……、ナニゴシヤベッテルンデスカコノヒト？

「そうか、名前も力も覚えてないんだな。じゃあ俺が、お前の名前をお前の魂に刻みつける。いいか？絶対に『聞く』んじゃない。も

し『聞いた』らお前の魂がぶっ壊れちまう。だから、絶対に『聞く』な」

そう言つて男は明久の額に手を当てる。

「いいか？お前の名前は……」

- - - - - 現実 - - - - -

明久はガバツ！と勢いよく飛び起きる。

「僕の名前が…そんな」

明久はシヨックを受けたように見えたが……

「まあ、中二つばい二つ名だと思つとけばいいか」

そうでもなかったようだ。

「アキ、おはよ」

「おはようございます、吉井君」

「あ、二人とも。おはよう」

学園祭二日目の朝。姫路さんと美波が揃つて登校してきた。

そんな二人に対して、慎重に言葉を選んで話しかける。

「あゝ、その……昨夜はぐっすり眠れた？」



「え？ はい。ぐっすりでしたけど」

「そう。それじゃ……朝ごはんはきちんと食べてきた？」

「はい。きちんと食べてきました」

「えっと、それじゃ変な夢とかは」

「ふふっ。吉井君、気を遣い過ぎですよ？」

あう。バレた。けど、暴行未遂なんて怖い目に遭ったんだ。

ショックを受けてないかを心配しない方がおかしいと思う。

「大丈夫です。大変でしたけど、不思議なくらい落ち着いてますから」

「そうなの？」

「はい。結局皆無事でしたし……それに、きっとまた吉井君が助けてくれますから」

そう言つて、無理のない自然な笑みを浮かべる姫路さん。

「アキというよりは一方通行と店員さんかもしれないけどね」  
アフセラレータ

美波も全然気にしている様子はない。この二人、凄く芯が強いみたいだ。  
すこ

見くびっていたみたいで逆に申し訳ない気分になってくる。

「元気そうで良かったよ。それで、今朝は特に問題は」

「……………異常なし」

「不審な連中はおらんかったぞ」  
ふしん

「そっか。ありがとう」

秀吉とムツツリー二も一緒に登校してきた。

昨日のこともあったので、今日は秀吉とムツツリー二に二人を迎えに行ってもらったからだ。

念のために借り物のスタンガンを持たせて。

「これくらいは当然じゃ。特にワシは昨日役に立てなかったしのう

……………」

「いや、それは縛られていたんだし、仕方ないんじゃないの？」

むしろ同情してしまうくらいだ。随分とお尻を触られたみたいだし。  
ずいぶん

「お、今日は無事だったか二人とも」

奥から雄二が頭を掻きながら出てきた。二人のことはあまり心配してなかったみたいだ。

ムツリーニと秀吉がついていたからかな。

「あれ？ 坂本ももう来てたの？」

「吉井君も坂本君も早いですね」

「朝一番でテストを受けていたからね。ふわあ……」

眠気であくびが出る。全然寝てないから当然だけど。

「もう、そんなので決勝戦は大丈夫なの？」

「相手はFクラス、心配いらないよ」

「そういうことじゃなくて、ウチはアンタたちの実力自体を心配してるんだけど……」

呆れたような美波の台詞。なんて失礼な。

「そんな心配をしている暇があつたら喫茶店の準備でもしてくれ。

ふわあ……」

「なんだか他人事ねえ。喫茶店の手伝いはしないの？」

「ゴメン。寝かせてもらえるかな？ ここのところあまり寝てない上に、昨夜は徹夜だったから眠くて」

いくらなんでもこの状態じゃ集中力がもたない。

体力には自信があるから、少し寝れば回復するはずだけど。

「そうだったんですか。それならゆつくり休んでください」

「そうじゃな。喫茶店の方はワシらに任せるといい」

「……………（コクコク）」

「仕方ないわね。起きられそうになかったら起こしてあげるけど？」

「ありがとう。それじゃ、十一時までに起きてこなかったら起こしてもらえる？」

「十一時？ 試合は一時からじゃなかった？」

「一番混み合うお昼どきくらいは手伝うよ」

それでも今からなら三時間は眠れる。僕と雄二ならそれで充分だ。  
「んじゃ、その時には俺も一緒に起こしてくれ。屋上で寝ているか

ら。ほわぁ……」

口に手を当てながら雄二が教室の扉に手をかける。

そっか。屋上か。あそこなら後夜祭用の放送機器（こうやさい）が設置されているだけだし、誰にも邪魔されずに眠れるな。

天気も良いし、絶好の昼寝場所だ。

「それなら僕も屋上にいるからよろしくね」

少しふらつく頭を押さえながら立ち上がる。

（やっぱり一緒に寝るんでしょうか……？）

（間違いないわ。きっと坂本の腕枕で……）

去り際に聞こえた会話は忘れることにしよう。夢見が悪くなりそうだから。

## 決勝戦

「さてと。行こうか雄二」

「そうだな。島田、俺たちは抜けるが大丈夫か？」

「大丈夫じゃなくても行かないとダメでしょうが。決勝戦なんだからね？」

結局、僕と雄二は手伝いを三十分くらいしかしていない。

疲れているだろうから、と気を遣って寝かせてくれたらしい。

なんだかんだ言っても、このクラスの皆は優しいと思う。

「後で私たちも応援に行きますね」

こちらは今日もチャイナ姿が眩<sup>まぶ</sup>しい姫路さん。

二日目の売り上げが好調なのも、彼女の魅惑のコスチュームが大きな要因の一つであるのは間違いないだろう。

「ここまで来たんじゃ。抜かるでないぞ？」

「……………優勝」

「わかってる。試召戦争の時みたいなヘマはしないよ。それじゃ、行ってくる」

「やれやれ。耳が痛いな」

秀吉とムツツリー二が突き出した手に軽く拳をあてて、僕と雄二は会場に向かって歩き出した。

「決勝戦を前に最後の妨害が来るかもしれないって思ってたんだけど、結局何もなかったね」

「もう小細工が通用しないと諦めたか、俺たちの居場所がわからなかったか。そんなところだろう」

「そっか。屋上に来る人なんて放送機器を使う人くらいだもんね」

その放送機器だって後夜祭の時にしか使われないし。

身を隠すにもうってつけの場所だったようだ。

「喫茶店の方は秀吉とムツツリー二が警備しているしな」

「あのスタンガン、服の上からでも通電する危険物って聞いたけど」  
「ま、死にはしないだろ」

二人に持たせたスタンガンは違法品のような気がしてならない。  
見た目もかなりヤバそうだったし。チラつかせるだけで大抵の連中は逃げていくからいいけどさ。

「あとはもう何もない。ただ勝っただけだな」  
「そうだね」

それっきり特に会話もなく、黙々と会場への道を歩く。

「ほほう。随分と観客が多いな」

「さすがは決勝戦だね」

会場を前にドクン、と少しだけ脈が速くなった。緊張していない  
と言えば嘘になる。

「吉井君と坂本君。入場が始まりますので急いでください」

僕らの姿を見つけた係員の先生が手招きをしている。

こうして係員をわざわざ配置してることとは、やっぱり決勝戦は  
今までの試合とは扱いが違うみたいだ。

「さて皆様。長らくお待たせ致しました！ これより試験召喚シス  
テムによる召喚大会の決勝戦を行います！」

聞こえてくるアナウンスは今まで聞いたことのない声だった。  
もしかするとプロを雇っているのかもしれない。

世間の注目を集めている大会だし、充分考えられることだ。

「出場選手の入場です！」

「さ、入場してください」

先生にボンと背中を叩かれる。

僕と雄二は軽く頷き合って、観衆の前に歩み出て行った。

「二年Fクラス所属・坂本雄二君と、同じくFクラス所属・吉井明  
久君です！ 皆様拍手でお迎え下さい！」

盛大な拍手が雨のように降ってくる。随分とお客さんが入ってい  
るみたいだ。きっとこの中には姫路さんのお父さんもいるのだろう。  
「なんと、最高成績のAクラスを抑えて決勝戦に進んだのは、二年

生の最下級であるFクラスの生徒コンビです！ これはFクラスが最下級という認識を改める必要があるかもしれません！」

（あの司会、嬉しいことを言ってくれるな）

（だね。姫路さんのお父さんに好印象になるね）

ここで僕らを持ち上げておけば『試験召喚システムのおかげで、最低クラスの生徒もやる気を出して学力を上げている』とPRできるからかもしれないけど。

どちらにせよこっちにとってはありがたい。

『そして対する選手も、2年Fクラス所属・須川亮君、同じくFクラス所属・御剣神哉君みつるぎこうやです！ 皆様、こちらも拍手でお迎え下さい！』

（雄二、最初に須川君から潰すよ）

（当たり前だ。須川は学力も操作も高が知れてるが、片方は全くの未知数だ）

同じように拍手を受けながら、二人はゆっくりと僕らの前にやってきた。

「店員さん！？」

御剣は昨日のカラオケの店員さんだった。

「どういう事！？」

「僕、あそこでバイトしてたんですよ。アハハ」と笑う。

「しかも2・Fって…登校してませんでしたよね？」

「はい。出席番号0番ですけどね」

『それではルールを簡単に説明します。試験召喚獣とはテストの点数に比例した』

アナウンスでルール説明が入る。

もう充分に知っていることなので、僕らはそれを無視して須川君に言う。

「須川君、降参してくれないか？ここは僕らに勝たせてくれ」

「駄目だ。たとえ明久の頼みとはいえそれはできない」

雄二は御剣の説得に入る。

「あんたは話分かる人だと思うから聞くが、負け「嫌です」…即答だな、おい」

「安心してください。腕輪が暴走するのは250点以上ですから」「何でそんなく『それでは試合に入りましょう！ 選手の皆さん、どうぞ！』チッ！」

説明も終わり、審判役の先生が僕らの間に立つ。

「『『試獣召喚』』』」

掛け声をあげ、それぞれが分身を喚び出した。

須川君の装備はオーソドックスな剣と鎧、だが御剣は違う。

漆黒がベースの甲冑。所々に金の装飾が見える。

その上から申しわけ程度に羽織られているフード付きの白いローブ。右手に白銀の長刀を携え、右腰には真紅の小太刀が差してある。

そして左手には白銀の銃、両太ももには同色のホルスターがあり、白銀の銃が携帯されているであろうことが見てとれる。

見て分かる通り、かなりの高得点者であることが想像できる。

『Fクラス 坂本雄二 & Fクラス 吉井明久

日本史 225点 & 402点 』

「『なっ！？』」

雄二と須川君が驚いている。

「どういうことだ？ 明久」

「僕にだって分からないさ。ただ、直感で答えたらこうなった」

「『……………（ジー）』」

くっ！見るなあ！僕をそんな目で見るなあ！僕は断じてイタイ子じゃない！！

そんな事を言ってる間に相手の点数がディスプレイに表示される。

『Fクラス 御剣神哉 & Fクラス 須川亮

日本史 1283点 & 57点

□

「「なっ!?!」」

なんて点数ッ!!二人合わせても2倍の点数差があるなんて……っ  
!!

でも、やるしかない!!

「明久。あそこまで俺に付き合わせたんだ。ここで負けたら承知し  
ねえぞ」

「わかってる。勉強教えてくれてありがとう。それなりに頭いいじ  
ゃん」

試験召喚獣が得物を構える。

「それでは行きましょう」

戦闘態勢になる。

「いざ尋常に…」

「「「勝負ッ!!!」」」



## 明久の能力

明久の召喚獣の腕輪が光る。

バトルフエイズ  
ブルータイフ  
「戦闘状態。蒼炎化」

明久がそう呟くと、召喚獣が蒼いオーラのような物を纏う。

センスモード  
アビリティアップ  
「直感操作。上昇値を最大に設定 能力上昇ッ！！」

その言葉と同時に本来の2倍程の速度で飛び出す。

「ッ！！」

須川は為す術もなく一瞬で間合いを詰められ木刀で一閃。

『Fクラス 御剣神哉 & Fクラス 須川亮

日本史 1283点 & 0点

』

「雄二！！行くよ！」

「お、オウ」

少し驚きながらもついていく雄二。明久がまた何かを言う。

スキルアナライズ  
「能力解析 こんな能力が二つも！？」

「どうしたんだ？明久？」

明久は少し動揺しながら言う。

「相手は能力を二つ持ってる。一つは封印。もう一つは次元操作だ！」

明久がそう言うのを待っていたかのように御剣は言った。

ゴッド・オブ・スキル  
「大正解。神次元操作！」

御剣の周りの空間が裂けて、そこに白銀の刀を入れる。すると、  
「雄二！うしろっ！！」

刃が雄二の喉元に迫る。しかしそれを明久の木刀が阻む。

それを見た雄二は自慢のメリケンサックを構え、御剣のもとへ駆けだす。

途中、手、足、刀が次元の裂け目から伸びてきて、雄二の行く手を阻む。

しかしそれを予測していたかのようにメリケンサックで相殺し、はたき落としていく。

いや、分かつていた。次の手は何か、いや、実際の所はその5手先まで分かる。

そして見える。相手の考えが、その奥の真意が、そして切り札をい

つ切るかも。

バンドラボックス  
「封印の匣。解放ッ！！」

それと同時に雄二は御剣と戦っている明久に聞いた。

「あれの効果は分かるか！？」

「封印だよ！選んだものをその箱の中に封印して、操れる能力だ！」

「ありがとな！！」

「どういたしまし てえ！！」

言葉とともに木刀を振るう。避けられるが気はそらせた。

「今だああ！！！！」

雄二は御剣がもつ箱から黒いナニカが現れる雄二はそれに向かって拳を振るう。

「それに当たると封印されちゃいますよ」

「知ってらあ！！」

ただ、黒いナニカは切られた。いや、斬られた。蒼い光によって。

オールブルー  
「完全蒼炎化ッ！！」

纏うオーラはさらに激しくなっていた。雄二は迷うことなく拳を振るう。

それだけならダメージは少ない。それだけなら。

チャージOK  
「装填完了。対象、坂本雄二。吉井明久。行くよ雄二！」

「来い！明久！」

ヘルブルチャーシング フルパワー  
「「蒼炎装填、最大出力」」

雄二にもオーラが移り、激しく燃える。

「コンデンセーション  
凝縮」」

明久は木刀が、雄二は拳が、まぶしい程に蒼く輝く。

「間にあわないッ……」

「吹っ飛べエエ……」

腹に木刀が刺さり、顔面に拳が当たる。そして

「リリース解放……」

青い閃光が会場を包む。しばらくすると光が収まりディスプレイの表示が見えるようになる。

『Fクラス 坂本雄二 & Fクラス 吉井明久  
日本史 0点 & 3点  
』

『Fクラス 御剣神哉 & Fクラス 須川亮  
日本史 0点 & 0点  
』

『坂本・吉井ペアの勝利です!』

「いいいよっしやああー!!」

全身が激しく痛むし、吐き気だっておさまらない。しかし明久は最高の気分を味わっていた。

「お兄ちゃん! すつつつごい格好よかったよ!」

「ぐふっ! は、葉月ちゃん……。今日も来てくれたんだ。どうもありがとう」

授賞式と簡単なデモンストレーションを終えて教室に戻る途中、凄い勢いで葉月ちゃんが飛びついてきた。わざわざ迎えに来てくれたみたいだ。

身長差で頭が鳩尾に直撃しただけ、ここはお兄さんのプライドでグツと我慢だ。

「二人とも、お疲れ様。凄かったわね」

「あはは。そうでもないよ」

「お兄ちゃん、凄いですっ!」

「葉月ってば。アキが困ってるわよ?」

美波が僕にグリグリと頭を押し付けている葉月ちゃんを見て苦笑している。

これ以上鳩尾を圧迫されると致命傷ちめいしょうになりかねないので、やんわりと彼女の身体を遠ざける。葉月ちゃん是不満げな表情を浮かべながらもおとなしく従ってくれた。

「あの、吉井君」

「あ、姫路さん。僕の活躍見てくれた?」

「はいっ! とつても素敵でした! 今度土屋君にビデオをコピーしてもらおうと思うくらい!」

目がキラキラと輝いている。

こんなに嬉しい反応をしてくれるなんて、頑張った甲斐があるというもんだ。

「ビデオねえ……。ムツリーニ、撮影なんかしていたの?」

「はい。ずっと熱心に撮っていましたよ。ね?」

「……………(プイッ)」

目を逸らすムツリーニ。

この男、さては試合そっちのけでミニスカートの観客とかを撮影していたな?

終了。

中途半端ですが。続ける事が難しくなってきたためこれを以って最終回といたします。

読んでくれた皆様ありがとうございました。

他にも連載作品があるので、そちらも見てくださいがあればありがたいです。この後の展開は、『常夏コンビは再起不能になり、襲撃はせず。街の復興が一通り完了したため、一方通行、他3名は帰ることになり、御剣神哉さんは一方通行達とともにどこかへ。で、明久達は、あの人たち何だったんだろうね』的な感じで終わりです。

ご愛読？ありがとうございます。

red sterを、今後よろしく願います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6750v/>

---

バカと昼寝男と超能力

2011年10月15日14時52分発行